
憲法の番人

爽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憲法の番人

【Nコード】

N4346T

【作者名】

爽

【あらすじ】

過去に存在した魔法使いが姿を消し、魔法の体質「魔質」を持つ人が現れた世界。嘘か本当か、必ず見極めれる魔質を持った「憲法の番人」と、過去に存在したある魔法使いの魔法によって人の姿を持ってしまった「憲法」。この二人のとある物語。

全ての始まり（前書き）

どうもこんにちは、相当久しぶりの投稿になります。爽です。修行してきました！……なんて事は全然ないです。

とりあえず自分のダメさ加減が分かっただけ。

ファンタジー初挑戦です。拙い文章でまだまだですが、読んでくださると嬉しいです。

誤字脱字、感想などがありましたらどうかよろしくお願いします。

全ての始まり

昔々、まだ魔法が一部の人間には使えていた時代。

ある一人の魔法使いがいました。

その魔法使いは、他の誰にも使えない魔法が使えました。

魔法使いの能力は「物質に意識を持たせる」という能力でした。

そのあたりに咲く花、道端の石ころ、料理に使う鍋、日常生活の周りにある、ありとあらゆるものに意識を持たせ人と会話する事ができる。そういうものでした。

しかし珍しいとはいえ必要な能力かどうかといえ、微妙な力でした。

例えば落とし物があつたら、その物自体に落とし主を尋ねるとか。物騒な話でいうのなら、人が殺されたら凶器に使われたナイフに犯人を尋ねるとか。そういった使い道はあるにはあつたのですが、あまりその魔法の使いどころはありませんでした。

そんな能力があつたからでしょう。魔法使いはとても優しい人でした。物を大切にし、勿論人にも優しく接する。決して目立つことではなくとも地道に生きる。そんな性格でした。

ある日、その魔法使いは政府の機関に勤めている知り合いに妙な事を言われました。

「その能力で、憲法に意思を持たせるとかできないのか？」

何故、知り合いがそのような話を持ち出してきたのか。魔法使いは疑問に思いました。尋ねてみると、知り合いは只の好奇心で言ってみたようでした。

憲法のような、ハッキリとした形がないものにも、意思を持たせ

ることができるのか。もし意思を持ったとしたら、どんな事を言うのか。

ただの、思い付きだったのです。

魔法使いも少し興味が湧き「じゃあ、やってみよう」と言っていました。

憲法は、分厚い一冊の本に記されていました。ある日、知り合いがその本を魔法使いの前へ持って来ました。魔法使いが本に手を触れてブツブツと呪文を唱えると、青い光が本を包みました。

そこまではいつも通りです。ですが次の瞬間、本が勢いよく開き中から光に包まれた女の子が一人出てきました。水色の綺麗な髪、白いワンピース、女の子は眠っているかのように瞼を閉じていました。

魔法使いもその友達も驚き、その話に興味を持って周りから様子を見守っていた数人も戸惑っているようでした。

その女の子は、只の女の子ではありませんでした。憲法に書かれている事なら忠実に従う、まさに『憲法』そのものでした。魔法使いは、どういう訳かその時憲法にただ「意識を与える」のではなく「人という器」も与えてしまったのです。

とりあえず眠ったままの少女を部屋に寝かせ、どうするか話し合うことになりました。ほんの、ちよつとした実験のようなものだったのに。こんな事になるとは誰も思いもしなかったのです。

魔法使いは、倒れてしまいました。理由は分かりませんが、魔法使いの本来ある能力以上の魔力を消費してしまい、自らの体力を削ってしまったのです。

そして、偉い人たちは気付いたのです。憲法とは国の動きの大本を決めるもの。当時、その国は軍国主義でした。もちろん、憲法の内容もそれに沿ったもの。魔法によって人の形を得た憲法はそういった戦闘向きの思想を持つ者なのではないかと。

憲法から人という器を取り除く方法は、魔法をかけた魔法使いが死んでしまい分からず仕舞い。そこで、その国は他国と約束をしました。「軍国主義の憲法はつぐらない」と。そうすることで、今回のような事態を防ごうという事になったのです。

それ以来、その国は平和主義となり、平穏で落ち着いた生活を国民は送っています。

小さな狭い書庫室のような所にいる一人の青年が、古ぼけた薄い本を閉じた。その本は、この国の童話が幾つか記されたものである。しかし、数ある童話のうち一つだけ明らかに童話とも小説ともいえない、なんとも微妙な短い話があった。

青年は溜息をつきながら本を本棚へ戻す。

ポケットに手をつっこみ、だらしないスーツ姿の青年はしばらくじっと本棚を見つめていたが、やがてゆったりとした動作で書庫室を後にした。

1・裁判じゃない裁判

「有罪。死刑」

最高裁判所の大法廷に、決して大きくは無いその一言が響き渡る。言葉を発したのは無造作な青な髪、黒いスーツに身を包み、メガネの奥は鋭く光る赤い瞳。二十代ほどに見える男が最高裁判所の壇上に腕を組みながら立ち、シンプルに言い放った。

何の感情も込められない、棒読みに近い声色のその言葉を被告人とされている男に叩きつける。その男と被告人以外、この大法廷に人の姿は見えない。広い法廷にたった二人のこの光景は、なんとも異様に思えた。

被告人は眉間に皺を寄せ、焦ったように叫ぶ。

「な、違う！ 俺はやっていない！」

「嘘はよくないぞー非常によくない。一家全員殺害なんて事やっておきながら『俺はやっていない』だあ？ 大人しくここは死んでおけ。それが世界のためだ」

被告人よりも幾分高い壇上から、軽蔑したような呆れたような見下す視線を面倒臭そうに投げかけるその男。

裁判長とされる者が座るその席で、偉そうに踏ん返り返るその様は、誰がどうみてもこの男が横暴な判決をしているようにしか見えない。その左右に、普通裁判所なら裁判官が座っている筈なのだが、影も形もない。

「何でだよ、本当に俺は……そんな残酷な事なんてしていない！
そもそも、この国はおかしいんだよ。何で、裁判がたった一人の裁判官によって行われるんだよ！ 全く持って理解不能だ！」

「ごちゃごちゃ五月蠅いんだよ。俺の所に被告人がまわってきた時点で、冤罪はありえねーんだからいいだろうが。ほら、しっけーい、しっけーい、さっさとしっけーい！」

死刑死刑と妙な音程を取りながらパンパンとリズムよく手を叩く男。ふざけているとしか思えないこの有様。しかし目には光が宿っておらず、鋭く被告人を射抜いている。

この国では、裁判は一人の裁判官によって行われる。しかし、ただの一般人がなるわけではなく真偽を見極める特別な瞳を持つている者のみになれる。この国では、百年以上前の頃には魔法使いが多く存在していた。しかし、魔法は潜在的な才能がある者にも使えたものであった。時を経つにつれ、魔法使いはどんどん減少し今では国中でのいるかいないか曖昧なほどだった。

その中で、僅かに普通の人間とは違う能力というか、体質をもつ者がいた。その体質は魔法の力が弱まったものではないかと思われていて、通称『魔質』。

この男の真偽を見極める瞳はその魔質の一つ。しかし、この魔質を持つ者はとも少なく力が弱い者ばかり。だからとりあえずこの力を持ったものは、裁判官や警察官として必然的に仕事をする事になり、力があることが分かれば即座に専用の訓練施設に入れられるのであった。

最高裁判所の裁判官は、その中で最も能力の高い者になる。普通、その瞳を持つ者が何人もいて、しっけーい確認してから判決を下すのだが……。

「俺はさあ、この国で唯一百パーセント嘘が見抜ける目を持っていてるんだよ。だから、テメーがどれだけ巧妙に証拠を隠蔽しようが、嘘をつこうが、無駄なんだよ。俺の質問にイエスとでもノーとでも

答えたら、それで判決は決まるんだよ」

頬杖を付き、面倒臭そうな雰囲気を隠しもしないで百パーセントの確立の男は言う。そこから吐き出される言葉には威厳も何もない。傍から見ればこの男がただ被告人を追い詰めて弄んでいるだけのように見える。

「ほ、本当に百パーセントなのかよ!? ただ国がそうやって工作しているだけとか……」

「あーもう、五月蠅い五月蠅い。本気で面倒臭いなお前。いいよもうそんなに死にたいのなら俺が今ここで……」

被告人の言葉をさえぎり、スーツの内側に手を忍ばせて勢いよくその手を前に突き出す。その手には冷たく黒光りする銃が握られていた。被告人は「ヒッ」と短く声を漏らして座りこむ。

「死刑にしてやるよ。大丈夫だ、心臓を一発で狙ってやる。苦しまずに逝けるぞ?」

ニヤアと口角を上げこれ以上ないくらいの黒い表情を浮かべて、銃口を被告人に向けたまま壇上を静かに男は下りる。

「ひ、ひいいいいい!」

「あー、動くなって。狙いがブレたらホラ、楽に死なせてやれねーぞ? 俺は別にそれでもいいけれど」

その呟きにパン、と乾いた音が重なる。尻餅をつき、その状態のまま後ずさっている被告人の尻のすぐ近くに小さな穴が穿かれる。

「あ、悪い、つい撃っちゃった」

大して悪びれた様子も見せず「あ、悪い、消しゴム落としちゃった」とでもいう時のようなノリで無邪気な笑顔を向ける男。瞬間、被告人は悟った「あ、俺ここで死ぬ」と。

その時だった。バンと大きな音と共に最高裁判所の扉が勢いよく開かれたのは。

「おい番人！ 何をしているんだ！ また銃ぶつ放したのかよ！」
「げ」

短くサラサラとした茶髪に茶色い瞳、細身で長身のモデルにでもなれそうな爽やかなオーラをまとった男が、そのさっぱりとした顔立ちに不釣り合いなほど眉間に皺を寄せて駆け寄ってきた。

被告人に銃口は向けたまま、男は苦虫を噛み潰したような露骨に嫌そうな表情を浮かべる。

「お前の能力は確かなものだがなあ、仕事の粗は酷いもんだぞお前！ 何でちゃんと説明して、刑を言わないんだよ！ 何で万引きだろうと詐欺だろうと殺人だろうと全部『死刑』の一言で済ますんだ。犯した罪にあつた刑をかける！」

「えー、それは、その、ほら、俺の能力でえーと、生かしておいたらこいつ今度は世界征服を企むだろうな、とか分かったからだよ」

「嘘付くんじゃねえよ！ ただ面倒臭いだけだろテメエ！ 世界征服なんて今時漫画でも企む奴いねえよ」

何の躊躇もなくその突然の乱入者は「番人」と呼んだ男から銃を取り上げる。番人は、お気に入りのおもちゃを奪われた子供のような拗ねた顔をする。それが先程までのマフィアか殺人鬼のような悪どい表情をしていた男とは似ても似つかず、被告人は人知れず寒気

を感じていた。

「で、コイツは？ 有罪か無罪かどっちだ？」

「有罪」

「そうか」

乱入者はガシツと腰の抜けた被告人の襟首を掴むと自分の顔と同じ高さにまで顔をもってくる。完全に戦意喪失と言うか、反論する気力もないような被告人はただビクリと怯えた様子を見せるだけだ。

「まあ、コイツだけに裁判を任せた俺たちも悪かった。だからまあ、あれだ。じっくりどんな刑を課すかは俺たちで考えてやるから安心しろ」

「は、はあ……ありがとうございます」

的外れなやりとりをすると乱入者はパツと手を離す。すっかり力が抜けた被告人はそのままドサリと倒れてしまう。

「やっぱり駄目だなお前。色々と駄目だ。人格に問題アリ、だ。何でお前なんか最高裁判所なんだよ。俺がなつた方がよっぽどいいね」

「ふーんだ、どうせお前は六十パーセント、だろ。俺とじゃ四十パーセントも差があるんだぜ？ もし俺が嘘の罪を被せられそうになつたら絶対百パーセントの方に判決を頼むね」

真偽を見極めるその魔質は、正確さがかなり低い。訓練しても四十パーセント前後が平均的、本来ならば六十パーセントでも相当の確立なのだ。しかし、明らかに異常と呼べる確率で嘘か本当か見極められるのがこの『憲法の番人』という名をつけられた男なのである。

茶髪の乱入者、レイズ・ルーイは心の底から深い深い溜息をつく。何でそれがこれなんだ。何で必ず嘘と本当が見極められるコイツが、こんな性格なんだ。二十五歳のくせして、妙に子供っぽい部分があり、何より記憶能力がザルに近く有罪か無罪かは分かってても、その後どんな刑を被告人に言い渡せばいいのか分からずとりあえず「死刑」としてしまおう。

最低最悪の人間だ。主に人格的に。こんな奴が全てを決めるくらいなら、俺が最高裁判官の位置についた方がいい、絶対それがこの国の為だ。

「じゃあ、刑は俺たちが審議するから。この人は連れて行くからな」「おー好きにしてくれ」

ポケットから飴玉を取り出し、口の中で転がしながら『憲法の番人』はヒラヒラと手を振る。そんな姿を見て再びレイズは溜息をつき、被告人を連れて最高裁判所を出て行った。

2・番人

誰もいなくなった大法廷で、番人は一人溜息をついた。

「あーあ、そもそも俺はこっちが本職じゃないんだっての……。レイズの野郎も分かってるだろ。まあ、仕方ないけどよ」

実際我ながらいい加減過ぎると思うしな。

口の中の飴玉を転がしながら、静かな大法廷を歩く。昔はここに傍聴人とか弁護士とかわんさかいたんだろうなあ。俺等みたいなのが出てきてからは、刑事裁判の時はこんな馬鹿でかいスペースは必要なくなっただけだな。

珍しくも昔の国の事なんて考えていたら、再び裁判所の扉が勢いよく開かれた。

しかし今度は正面の扉ではなく、裁判所の隅に備え付けてある関係者用の扉だ。

「おい番人！ レイズが仕事を持っていったんだろ。それなら早く来てくれ！」

大して記憶なんてしていないが、とりあえず同じ「仕事」の奴のようだ。適当に返事をしてから、そちらに歩く番人。

俺だって別に好き好んでこんな体質になっちまった訳じゃねーんだぜ、レイズ。

仮にも先輩の立ち位置となるレイズに対して心中そんな事を呟きながら、いつもの如く面倒臭そうな表情を浮かべて、彼は「本職」へと向かうのだった。

「あ？ んなもん『憲法』にできるわけねーだろうが。いい加減にしろよ」

「何を言う！ 最低限度の自衛はする必要があるだろう。もしも他の国から攻められたとき、魔法使いも皆無、魔法の劣化ものとも言える『魔質』もお前のような本当か嘘が見極めるだとか、少し自分の体を浮かせる事ができるだとか、静電気を調節して少し放出できたりだとか、実用にはほぼ向かないものだ！ 我が国は世界で最弱と言っても過言ではないぞ」

よく噛まないでここまで言えるな、台本でもあるのか？ と頭の中で皮肉を言いながら番人は応酬する。

「ああん？ お前その最低限度つてどの程度だよ？ 他国に対抗できるつてーことは、それなりの武力だろうが。テメエそのうち『憲法』をうまいこと操って戦争を仕掛けるつもりじゃねーだろうな？」

口は悪く、柄も悪く、敬語なんてどこにも見当たらない。そんな態度で、国家権力の上層部にあたる人間と話せる相手なんてのはこの番人程度なものだ。

髭を顎にたくわえ、いかにも上等なスーツを着ている相手の男はこめかみに青筋を浮かべながら、今にも番人に掴みかかりそうなほど苛立っている様子だ。対して番人は、赤い瞳を細め面倒臭そうな表情を全く変化させていない。

場所は最高裁判所内にある、小さな会議室。デスクに先程の裁判時の如くふんぞり返り、自分より上の人間よりも、遙か斜め上の立場であるかのような振る舞いである。いや、どちらかと言うと教師にいくら怒られてもふてぶてしく言い訳する中学生のようだ。

デスクに手をつき、拳を握り締める男はぎりっと分かりやすく歯軋りをすると痺れを切らしたように怒鳴る。

「くそ、これ以上お前のような奴と話していても埒があかん！ もつと別のまともな連中と話してくる。何が『憲法の番人』だ！ 最高裁判所の人間版のようなものだか何だか知らないが、お前のような若造一人に憲法の内容を全て一任するなんて苛々して仕方がない！」

腹いせだか何かしらないが、ガン！ と自分の拳の方が痛いんじゃないかと思う程強くデスクを殴り、男は部屋を出て行った。

「ふん、いちいち声がでかくて五月蠅いんだよ、バカヤロウ」

子供のように、べえっと舌を突き出して男の出た行った扉を見つめる番人。

すると、入れ替わりのように一人の女性が部屋に入ってきた。肩より伸びた少し赤味がかかった茶色の髪は、綺麗に整えられていてさらりとしていた。力強そうな瞳に、整った顔立ち。長身気味だ。

その女性は舌を突き出したままの番人を見て、ピタリと動きを止める。

「……また妙な飴舐めていたでしょ。舌が青色になってる」
「うお、まじか！」

慌てて口を押さえる番人。そんな番人の様子に呆れながら女性は二、三冊のノートを番人の前のデスクに置く。

「はい、この間、憲法に入れる内容について話し合った会議のまとめよ」

「全部却下で」

「ちゃんと目を通しなさい」

「じゃあ許可なしで勝手に俺の部屋に入り込んで、ぎゃあぎゃあ騒ぐ奴を止めてくれよ。えーと、さっきの名前何だっけ？」

頭の後ろで腕を組みながら気だるげな雰囲気醸し出す番人を見て、呆れかえる女性。いつもの事だとは思いつつも、よくもまあこんな人間がこんな役職についていられると常々思う。もちろん、これはこの女性だけではなく、大勢の人間が思っている事だが。

しかし、どうにもこうにも魔質やその他の要素により、この者くらいしかこの『憲法の番人』は勤められないのが悲しい現実だ。

「アンタの記憶能力の悪さにはほとほと呆れるわね」

「悪いけど興味無い事は覚える気がないんだ」

「自分の本名も名乗らないのはひよつとして、忘れてるからなの？」

「あの名前は嫌いなんだよ。別にいいだろ『番人』とでも呼べば俺だと分かるんだから」

何故かこの男は自らの本名を名乗りたがらない。しかし、本人の言うように最早『憲法の番人』というのがこいつの名前になっているようなもの。一応のところ困りはしないし、どの人間もそう呼ぶためしっくりきてしまっている。

「もしかして私の名前も忘れていたりしないでしょうね？」

「……大丈夫だって覚えてるって」

そう言いながらも、目をそらし口元を引き攣らせている番人。瞳が左右に動き、明らかに動揺している様子だ。

「……あの、ほら、アドレナリンだろ、お前」

「全然違うわよ！ アルバよアルバ！」

「最初の文字はあっているだろ！」
「文字数が全然違うじゃない！」

女性改めアルバがふと部屋に設置してある時計に目をむけ、はっとした顔をする。

未だにぶつぶつ「いやでも何となく雰囲気かすつてる気がしなくも……」などと呟いている番人の腕を力強く掴んだ。

「要件はこんな事じゃないわ。早く『憲法』の処へ行つて。呼んでいたわよ」

アルバの発した『憲法』という単語に、今までの無茶苦茶な子供のような雰囲気ピタリと固まる。そして、少し困つたような戸惑うような、嫌なような嬉しいような、そんな多くの感情が入り混じつたような表情を浮かべた。一見するとそれは、苦笑とも捉えられた。

「……分かつたよ、行くよ」

先程までの口調とは一変、穏やかな声でそういうと、静かに番人は立ち上がった。アルバの持つてきたノートを小脇に抱え、無言で扉を開けて部屋を出て行った。

部屋に一人残されたアルバは、何度目か分からない溜息をつく。

「……相変わらず、よく分からない人間ね……」

誰にいうわけでもないその呟きは、静寂の中へ消えていった。

この国には、ある童話が伝えられていた。簡単にいえばその昔、とある魔法使いの魔法によって人の姿を与えられた『憲法』がいて、それによって戦争が大きく動かされたということだ。

しかし今現在も本当に『憲法』がいるかと言うと、どうにも曖昧な部分が多いようだ。あくまでもその物語は童話としてしか広まっていけない。何百年か昔にこの国がたくさんの他国と戦争をしていたのは確かだが、結局負けている。おまけにその戦争の資料はほとんど失われているのだ。

現在では魔法使いもいるかいないかよく分からず、魔法に代わる物は科学としてたくさんの方が開発を進めている。せいぜいその時代の忘れ形見と言えば魔質くらいなものだ。

生きていない、人間じゃないものを人間にする。そんな事が本当に可能だったのだろうか。魔法や魔質がどういう原理で成り立っているのか、今のところは科学者であっても誰も分かっていない。その為、憲法の有無も未だ証明されず仕舞いだ。そう、表向きには。

番人がある大きな扉の前に立っていた。豪華な鍵がつけられ、様々な装飾が施されたその扉は見るからに重そうだ。番人はポケットの中から鍵を取り出すと、躊躇いなくその扉を開けて、部屋に足を踏み入れた。

その部屋は、一言で表すならば、真っ白だった。

白を基調としたカーテンや壁紙、家具。色のあるものとしても、それは水色や桃色など淡い色合いのものが多く。

その部屋の窓辺に、一人の少女が腰かけていた。

少し薄い青色でウェーブのかかった髪、真っ青のビー玉のような瞳を持っている。部屋と同化してしまいそうな程白いワンピースに

身を包み、どこかふわふわとした雰囲気を持っている。外見的には十二歳前後といったところだ。

扉の音に反応し、振り向くにつこりと笑顔を浮かべた。

「番人久しぶり！」

椅子から飛び降りると、無垢な笑顔を浮かべながら番人に抱きついた。

思った以上に勢いがあつたのか、番人は扉に背中をぶつけて小さく呻く。

「うわ、お前、急に飛びつくなよ」

「久しぶりだねー番人！」

「久しぶりって言ったって今朝会ったじゃねーか！」

「朝八時だよ？ 今はもう九時間も経っているんだよ？」

「大した時間じゃないだろ！」

番人は自分より相当背の低い頭を撫でる。その姿は先程までとはまるで別人のようだ。

そう、この少女こそが、何百年前にある魔法使いによって「人」という器を与えられてしまった『憲法』なのである。

3・憲法

番人はとりあえず憲法を自分の体から放すと、笑顔で自分を見上げてくる憲法の頭を再び撫でる。

「で、何でわざわざあの……アレバ……違うな、アレイを使って俺を呼んだんだよ」

「アルバだよ、番人。ちゃんと覚えてあげてよ」

相変わらずにこにことした笑顔のまま。呆れた顔、怒った顔、困った顔ばかり見るような生活や行動をとっている番人にとって、いつ見ても笑顔の憲法はやけに新鮮に思えた。

「まあ特にこれといった理由はないんだよ！ 部屋にいても何もする事がなくて暇だし、番人でもいれば楽しいかなって思っただけ」

「俺は暇じゃない時はどうするつもりだったんだよ」

「どうもしないよ。その時はその時でまた別の暇つぶしを考えるから！」

屈託のない笑顔を浮かべながら喋る。憲法と話す時、番人は笑顔以外の表情を殆ど見た事がない。いや、それは番人でなくても同じだろう。

憲法には、感情が欠落している。

全く無いわけではないのだろう。しかし、感情の起伏など殆ど現れず、悲しい、嬉しい、楽しい、寂しい……誰しも持ち合わせているそうだった『想い』を理解する事ができない。自らも持ち合わせていない。

憲法は、この国で定められた国の最高法規「憲法」の内容に沿っ

た特殊能力を得る事ができ、憲法内容に沿った行動を基本とし、そういった人格を持つ。憲法内容全てが能力に変換できるような内容でない時、一部適応されないものもあるが。

しかしこの国は、何百年も前に戦闘能力に長けた憲法を戦わせ続けた過去を持っている。とある童話で伝えられていた通り、結局は戦争に負けて、それ以降はそういった軍事力を持つような内容のものを、憲法にする事は固く禁じられているのだ。

しかし、そうはいつてもやはり戦争を考える者もいるし、憲法の能力を利用しようと考える輩も多い。

そのために、憲法の番人がいて、妙な憲法を創りださないように見張っているのである。魔質の力もあり、相手が口先でどれだけ綺麗に飾ろうと、番人にはその下の思惑がはつきりと分かる。

現在の憲法内容は大雑把に表すのなら「平和主義」と「平等」の二つ。人格や能力に変換できそうものはこれだけ。

過去の事もあり、簡単に憲法があまり定められていない。自分の元となる情報が少ないため、一見無邪気で無知な、幼い子供のような姿と行動なのだろうと一部の間では言われている。

「番人番人、暇だよ」

ぐいぐいとスーツの裾を引っ張ってくる憲法。暇とはいえ何をすればいいんだ。と困ったように眉を寄せる番人。

「暇とか言っけど何がしたいんだよ。俺を呼んだところで何にもならねーからな」

「番人なら何か楽しい事してくれるって私信じているから」

「無茶苦茶な事言っな」

穢れを知らないような笑顔の憲法を見つめつつ、番人は適当に思考を巡らせる。そもそも憲法には好みや趣味や、そういうものが特定されない。「好き」と言った物を次の日には「どうでもいい」と思っていたり「嫌い」と言った物を次の日には「好き」と言っていたり……そういう事はしばしばある。

こいつの暇つぶしなんて今までなら本の一冊や二冊読ませておけば何とでもなっていたけど……今日はそれも飽きているみたいだな。

昨日の暇つぶし用に渡した本は、白い部屋の片隅にポツンと寂しげに積み重なっている。分厚い小説には、栞の紐のようなものが挟まっているが、憲法はそれに見向きもしない。昨日はあんなに面白そうに読んでいたのに。

こいつの楽しそうな事、ねえ……。

首元に手を当てながら、憲法の興味の湧くようなものについて考える番人、その下で「ひまー」と喚く憲法。

傍から見れば歳の離れた兄妹、または子守りを任せている若者のようにも見える光景だ。

「……しょうがねえな。じゃ、少し外にでも出てみるか？」

「いいの？」

散々思考を巡らせた挙句、番人は憲法を外へ連れ出す事に決めた。立場上なかなか外に出る事もできず、その為にコイツはいつも暇をしているんだ。俺が憲法の番人と呼ばれているのは、こいつのポデーガードのような役割をしているのもある。こいつが『憲法』なんて妙で厄介な存在なんて、一般人は知らないし、俺もいるし大丈夫だろう。

樂觀的にそうきめつけた番人は、早速憲法を連れて部屋を出て行

こうとする。

「いいだろ。傍から見ればお前なんてただのガキさ」

「酷いなあこれでも番人より生きているのにー」

憲法は小さく笑い声をあげると、番人の腕に自分の腕を絡めた。癖のついた薄い水色の髪が揺れる。

「良い暇つぶしになりそうだし、そうしようよ。私もつと外の様子見てみたかったんだよねー」

楽しそうな笑顔を浮かべながら憲法は勢いよく扉を開いた。たまたま扉の前にいたのであろう、関係者らしき男が驚いた様子で肩を震わせた。

「丁度いいや、俺少しコイツ連れて散歩してくるから後は頼むぜ」

「え、ああ、分かった……って、ちょっと待ってくださいよ！ そんな勝手な事駄目に決まっているじゃないですか！」

慌てた様子で番人の腕を掴み、引き留めようとしてくる。番人は半目でいかにも面倒くさいと思っっているのを隠しもしないで、その腕を振り払う。

「大丈夫だったの、怪しい奴なんて見たら一発で分かるし」

「そういう問題じゃないですよ！ 今日はこの後から憲法には用事があつて……」

用事、という言葉に番人はピクリと片眉をあげ、男の胸倉をつかむ。背が低く番人の影に隠れている憲法に、その表情は見えない。ただ、いつもより少し低く不機嫌そうな声が響いてくるだけだ。

「用事？ おいおい何適当な事言ってはぐらかそうとしてるんだよ。言っておくが、テメエ等の思い通りになんて俺がさせないからな」

「し、しかし……研究は……憲法の為にもな……」

「上層部の連中がコイツをいのように扱う方法を探す為になる、の間違いじゃないのかよ？」

苦しそうに声を出す男にお構いなしで、ぎりぎり両手で力強く服の襟を締め上げていると、番人のスーツに小さな力がかかった。

「番人、苦しそうだから離してあげなきゃ駄目だよ。ね？」

少し困ったような笑顔を浮かべる憲法を一瞥すると、番人はパツと手を離す。男は数歩後ずさってから勢いよく咳き込んだ。憲法は未だに無邪気な顔で番人を見上げている。その頭を乱暴に撫でると、小さく舌打ちをしてから憲法の手を握り静かに歩きだした。

無言で歩き、四階から一階を目指し続ける。静かな階段には二人の足音しか響かない。二階の階段のあたりで、憲法が下から番人の顔を見上げて口を開いた。

「どうしたの？ さっきから何だかムスツとしてるよ」

「何でもねーよ」

「あの人、何か番人の嫌な事でも言ったの？ そんなに私と早く出かけたかったのー？」

からかうように軽い口調で言う憲法の笑顔には一点の曇りもなく、対して番人の表情には苛立ちと不満が入り混じった曇りに曇ったものが浮かんでいた。

そんな番人の様子を気にするような言葉を放つ憲法だが、その割

に表情は明るく、目に見えて分かる不機嫌そうな番人にいつものように、笑顔を向けている。

しばらく無言で憲法を連れていた番人だったが、そんな憲法をもう一度ちらりと見てから、小さく溜息をついた。

「……とりあえず、出かけるか」

「うん！」

少し口元を緩めると、一階の階段のすぐ裏に隠れて存在する扉の鍵を開ける。すると少し狭い廊下があり、つきあたりに憲法の部屋程ではないにしろ、装飾の施された扉があった。

「全く、たかだか裏口にまでこんな派手に飾りつける意味が分からねーな。裏口なら裏口らしく地味にしときゃいいのに」

「私は嫌いじゃないけどなー派手なのって」

この間は自分の部屋の扉見て「もっとシンプルでもいいと思うな」とか言ってたじゃねえかよ、という言葉をすんでの所で飲み込む。言ったところで無駄だと分かっている。こいつは何にも依存しないし何にも興味はない。自分だろうと、他人だろうと。好みも何も存在しないんだ。

分かり切っている事なのに、そう考えると時々訪れる少し寂しいような虚しいような、この感情は一体何だ？

がしがしと乱暴に頭をかきながら、番人はその考えを振り払う。考えても無駄な事だし、考える事自体が面倒だ。

がちやりと扉の鍵を開けると憲法と番人は外へ出た。

4・変化

裏口から出ると、そこには石畳の道があり、中庭のようなものがあつた。

初夏を迎えた今の時期、空は夕暮れ時とも夜ともいえないなんとも微妙な色をしていた。

しまった、外に行くなんて適当に言いだしたはいいものの、時間をもっと考慮するべきだったな。思いつきにも程がある提案だったから。

あまりのいい加減さに少し後悔しながらも、今更止めるとも言えない。

「あんまり遅くなると妙な連中も出てくるからな。少し街の方をぶらぶらしてから帰るぞ」

「はい」

どこの親子だよこのやりとり、と思いつつ番人は腕時計に目を向ける。一時間くらい散歩して戻ってくればいいだろ。普段よりも少し違つただけでも暇つぶしにはなるはずだ。

番人が歩き始めると、憲法もてくくとついてきて、番人の腕に自分の腕をからめた。どこで覚えてきたのか分からない鼻歌など歌つている様子だと、どうやら随分機嫌はいいようだ。

「どこか行つてみたい場所とかあつたりするか？」

「別にないよー、人がいっぱいいるところだと面白そうだな」

人が大勢いる所となると、すぐ近くの市場がいいだろうとあたりをつける。人も多く、雑貨や食べ物や様々なものが並べられている。見るだけでも面白いかもしれない。そういえば今の時期は大市とか

いう、あちこちの国から商人たちが集まって来ているらしい。

珍しいものもあるかもしれないし、そこなら何か面白いものがあるかもな。

しかし、そこまで考えた所で番人は一つ重大な事を思い出す。

「大市とか何処でやってるんだよ……」

+++

「やべーもう四十五分も経っているとか」

結局何処でやっているのか悶々と悩みあちこちと街中を歩きまわり、掲示板を見たり通りすがりに尋ねてみたりすると、別段風変わりな場所で行っているわけではないようだ。

いつも市場が行われている街の中心で開催されるらしい。

「くそ、アホな事をしちまったもんだ。何でわざわざ俺は繁華街から離れているんだ」

方向音痴の気があるらしい番人は軽く頭を抱えた。面倒くさがって食事なんてその辺りの喫茶店で済まし、服も基本的にはスーツな為、しょっちゅう買いに行く事なんてない。つまり市に行く事なんてそうそうないのだ。必要性がないのなら下手に外出なんてしたくないと考える典型的な引きこもりタイプ。

自らに苛立ちを覚えつつ早足で市の行われている中心街へと向かう。このままでは無駄な体力と時間を消耗しただけで一時間が終わってしまう。憲法がまた不機嫌になるかと番人は思い、恐る恐るといった様子で憲法の顔を窺うが予想に反して憲法は笑顔を崩さなかった。

「……何か悪いな。大して何もしなくて」
「別にいいよ？ 人の様子が見えるだけでも案外面白いし」

道端で談笑する女性たち、楽しそうに走り回る子供、俯いて幸薄そうに歩く老人、中睦まじそうな男女。

どこにでもあるありふれた光景だが、憲法はそれを興味深げに眺めている。何が面白いのか番人には理解できなかったが、最高裁判所内の一室に閉じ込められたお姫様のような扱いを受けていた憲法コイツにとっては、充分に新鮮で風変わりなものに見えるのかもしれないと改めて感じていた。

空が暗い青紫色から藍色に変わったころ、番人と憲法は人混みの多い賑やかな通りに到着していた。番人が腕時計を見ると時刻はだいたい六時十分。本来ならば今頃帰り道だろ。時刻が遅くなればなるほど、怪しい輩も増えてくる。「憲法」の存在は一般に公開されていないし、容姿も何も分かるはずがないのだが、警戒するに越した事はない。

あちこちに屋台が並び、まるでお祭り騒ぎだ。人々が賑やかにせわしなく通りを動き回る様子を憲法はニコニコしながら眺めている。

「あー……何か欲しいものとかあるか？」

「そうだねえ折角来たんだから欲しいけど、別にこれといって欲しいものもないなあ」

「結局のところどっちなんだよ」

「何でもいいしどっちでもいいよ。番人決めてよ」

「それが一番困るっての」

きよるきよると店を見て回るが、憲法の好みなんてその時によるからどうにも把握しにくい。ふと十六、十七歳くらいの少女たちが集まっている店が目にとまった。そちらに歩を進めて遠巻きに見ると、どうやらアクセサリーショップのようだ。髪留めやヘアゴム、

ネックレスやブレスレットが並べられているのが見える。

最近はあるあいうのが人気なのか？ 流行に疎い番人にはいまいちよく分からないし、そもそも性別が違えば嗜好も違う。

キラキラと光るシルバーアクセサリーや、安物ではあるだろうけど宝石のような物のペンダントが置かれているのが遠目に見えた。憲法も女の子だ、結構興味が湧くのではないだろうか。

「オイ、お前もたまにはああいう物つけてみたらどうだ……」

と言いかけて隣を見ると、先程までそのあつたはずの水色の頭がない。あたりを見渡してみてもそれらしき姿が見当たらない。

嫌な予感が番人の頭を掠め、冷や汗が滲み出る。あんな小柄で力もない少女なんて、簡単に連れ去られてしまうだろう。慌てて店の周りに集まっている人混みをかき分けて憲法を探すが、どこにもいない。

名前を呼ぼうとしたが、普通「憲法」なんて名前を付けられる人間はいない。こんな所で迂闊に呼ぶわけにもいかず、言葉が喉につかえて余計に焦りが生じる。心臓がばくばくと音を立て、どんどん思考回路が悪い方向に進む。もしかしたらお菓子か何かで釣られてどこかへ連れ去られているかもしれない、人混みに紛れて見つからないかもしれない、不審者に妙な事をさるかもしれない、怪しい物でも売りつけられているかもしれない……。まずいぞ、落ち着け俺。

自分で自分に落ち着くよう言い聞かせながらあちこちを見渡し、うろつろつと周辺を動き回る。どこかの店でも見ているのかと思ってもそれらしい影は見当たらない。

一見拳動不審ともとれる動きを見せていたその時、番人の視界にちらりと水色のふわふわの髪が目に入った。

「おまつ……！」

「何怪しい動きしてるの？ そんなに慌てて」

小走りにこちらに駆け寄ってくる憲法の姿がそこにはあった。きよんとした顔をしてこちらを見上げている。

一人で焦っていた自分が馬鹿らしくなり、はあ、と溜息をついて頭に手を当てる。

「……勝手に一人でどこか行くなよ。心配しただろ」

「ごめんごめん。さっきそこで見た事もない動物が歩いていてさ、見て！」

憲法の両腕に抱えられていたのは痩せた白猫だった。「みゃー」と小さく鳴きながら大人しく憲法の腕のなかに収まっている。珍しそうにその毛並みを眺めながら笑顔を浮かべている。

そんないたっていつも通りの無邪気な様子を眺めていると、人の気もしらないでコイツは……と、微かに苛立ちが番人の中に生まれる。こんなに色々と心配したり不安になったりしているのに、本人はそんな番人の心境など意にも返さない。気がついたらぺちん、と軽く憲法の頭を叩いていた。

驚いたように顔を上げ、訳が分からないと言いたげに首をかしげる憲法。その拍子に憲法の力が緩み、子猫は短く鳴きながら腕の中から逃げ出してしまった。

「あのなあ、一応自分の立ち位置をもう少し考えてくれよ。お前の情報が漏れるなんて事はないと思うけど……妙な魔質の奴だっているかもしれないし、お前の事守りきる為にも、ふらふらされたら困るからな」

「……そっか、そうだろうね。分かったよ」

普段より心なしか声のトーンが低い憲法。身長差が大きいというの

もあり、番人には僅かに頷いた憲法の表情は見えなかった。ただ、どことなくその「分かったよ」という言葉には何か含みがあるような、そんな歯切れの悪い言い方だった。

しかし、顔を上げたその憲法はいつものようににっこりとする。

「じゃあそろそろ帰ろうよ！ 私もう飽きたや」

「おいおい」

ここに来てまだ大して時間も経ってないのにもうこんな事を言い出す始末。それならば、折角来たというのにこのまま何も買わずに帰るのも個人的にしっくりしない。そう考えると番人は憲法の手を引き、先程見ていたアクセサリーショップへと向かう。

年頃の少女達があればこれやと様々な装飾品を眺めている所に、憲法と乱入すると、ほんの数秒だけ数々のペンダントやネックレスを並べられている棚を見渡すとそのうちの一つをぱっと手に取った。

「おい、これくれ」

店員らしき女性にぶっきらぼうに言いながらそれを購入すると、周りの女性客の妙な視線に耐えきれなくなったのか、足早にその場を去る番人。憲法は何も言わずに、大人しく番人に連れられるままだ。

屋台の並ぶ通りから少し離れた所で、番人は憲法に半ば押し付けるようにその買ったものを手渡した。

「折角来たのに何も買わずに帰るのもアレだろ。……適当に選んだから、気に入らなかつたら好きにしるよ」

憲法に手渡されたのは、砂時計の形をした小さなペンダントで、

本当の砂時計なら砂が入っている部分に透き通るような水色の宝石が埋め込まれている。憲法の好みなんて分からないし、そもそも好みがあるのかどうかすら怪しいが、これでも番人なりに選んだつもりだった。

誰かの為に何かを買った事など今までになかったせい、妙な気恥しさが番人を襲う。

憲法は無言でペンダントを見つめている。

せめて何か言ってくれ、いいとか悪いとか、何でもいいから言ってくれ。この無言が一番つらい。

そう思いながらスーツのポケットに手をつ込み、少し視線をそらしながら憲法の様子を窺う。

すると憲法は顔を上げて、まっすぐ番人の方を見た。

そしてほんの一瞬だけ、無垢で何も知らなさそうな笑顔を消して、いつもの笑顔を消して、とても人間らしく、とても年相応の女の子のように、恥ずかしそうに、はにかんだ。

「ありがとう」

5・怒りと恐怖

「あのな、番人……いくら憲法が暇だと喚こうが、外に出すのは危険極まりないぞ。出るにしてももう少し憲法の護衛を強化するとか、色々手はあるだろ」

「あー」

「見張りの一人を締め上げたんだって？ お前が憲法の扱われ方に不満を持っているのは知っているが、憲法の力は未知数なんだ。俺たちはやっぱりそれを出来る限り知るべきだと思う」

「あー」

「しかも行った所は市場だろ？ どういう人間がいるかも分かったもんじゃない。憲法はあんな幼い子供のような姿で、着ている服も派手ではないが素材は一級品だ。金持ちの子供とでも勘違いされて誘拐される可能性もゼロではないからな」

「あー」

「……お前、俺の話をちゃんと聞いている？」

最高裁判所内には番人の控え室のような部屋がある。小さなデスクと、ソファとテーブルがある。デスクの近くの棚には番人の私物である菓子類や本が数冊、乱雑にしまわれてある。その部屋で番人はソファに座り、只今レイズによって説教を受けているのだがそれに対する反応は生返事のみ。ぼんやりと虚空を見つめその瞳は決してレイズを捉えず、どこか別の何かを浮かべているようだった。

そんな番人の様子に苛立ったように腕を組むレイズ。

「いつもそうだけど、お前って反省の色って奴を本当に見せないな。ガキじゃねーんだから、普通もうちよつと何かあるだろ……」

「あー」

「……どうしたんだ、一体」

何を言ってもまともな返答が返ってこない。普段なら「反省の色って何だよ。どんな色なのか見せてくれ」くらいの憎まれ口はたたくだろうに、それすらもない。流石に怪訝に思ったレイズは番人の目の前で手をぱたぱたと振ってみたりするが、反応なし。しばらく無言で何か考える素振りをみせてから、頬を両手で横に引っ張ってみたら顔面を殴られた。

「いきなり何するんだよレイズ」

「お前こそ何ですつとばーつとしてるんだ。こちらとら説教中だぞ、人の話を聞け！　そして反省しろ！」

「俺に反省点などない。常に前を見て歩き続けるからな」

「そこで真顔！？　本気で言っているのかよ！」

主に一番ダメージの大きかった鼻を押さえながら、レイズは呆れた視線を投げつける。いつも通りのやりとりだ。番人はいつものように、屁理屈や無茶苦茶な事を言っている。しかし、ふとその応酬が終わると再びどこか虚空を見つめるような、瞳に何を映しているのか分からない表情を貼りつけた。

「出かけた先で何かあったのか？」

今度は無反応ときたものだ。先程までの生返事すら帰ってこない。さて今度はどうしたものか、いつそ俺も殴るか、などとレイズが思考を巡らせていると、暫くして番人が小さく口を開いた。

「……なあ、あいつの表情って、ある程度のパターンしかないんだよな」

「あ？」

急に何を言い出すんだと不思議に思いつつもレイズは応える。あいつというのは、憲法の事だろう。

「まあ、そうだな。基本的には笑顔と無表情のふたつ。困った顔や驚いた顔も見せる時は見せるな。感情の起伏の激しい表情はまず見せない。怒った顔や泣いた顔とか」

「……はにかんだ」

「は？」

「あいつ、少し恥ずかしそうに、はにかんだんだよ」

レイズが目を見開く。今までとは違う表情の変化。憲法は基本的にはほとんど感情を持っていない。憲法の見せる笑顔は、過去にいた、常に笑顔を浮かべているような「憲法の番人」の真似をしたものだ。それまでは今のような仮面の表情すらない、本当にただの無感動、無表情状態だったのだ。

それが、別の笑顔を見せた？

何も感じていない、何の意味も持たない、一見無垢で無邪気で纯真そうな、けれどその中身は空っぽの笑顔とは違う、意味のある笑顔。

それが持つ意味は何なのか、レイズには理由のよく分からない焦燥感にかられた。

暗くはないが、決して明るくはない、真剣なようなどこかぼんやりとしているような顔の番人を見つめながら、レイズは僅かに上擦った声を出した。

「それって、要は憲法が……憲法は……」

一度ごくりと唾を飲み込んで、レイズは続ける。

「感情を持ち始めている、って事か？」

沈黙が二人の間に流れる。憲法が感情を持つとどうなるのか。正直なところ二人とも知らなかった。研究機関ならば知っている者もいるかもしれないが、二人には憲法の研究内容など知らされていない。知る術もない。もしかしたら誰も知らないかもしれない。

「番人、それ報告したか？」

「してねえ」

「え、何でだよ！ 憲法の変化は報告し、それを元に色々と調べていかないか……」

瞬間、番人が勢いよく立ちあがってレイズの胸倉を掴んで、思い切り頭突きをかました。突然の事にふらつきながらレイズは呻きながら額を抑えて座り込む。番人の足元にはカシヤンと音を立てて眼鏡が落ちた。

赤い瞳が、レイズを射抜くように睨みつける。一瞬だけ怯む。

「あいつが感情持ったから何だっというんだ。人の姿をしているんだぞ。いや、つまりは一人の人間じゃねえか。何でいちいちその程度で報告だの研究だのこちゃこちゃ言い出すんだよ」

しまった、とレイズは思う。番人は憲法が研究対象、と見られている事を嫌っている。今日はそれで見張りの奴が締め上げられたっていうのに、何迂闊な発言をしているんだと後悔した。

レイズにしてみれば、番人の気持ち的理解できない。何故そこまで憲法に肩入れするのか。何故そも憲法を擁護しようとするのか。以前聞いてみても「うるせえ」と一蹴されたのだが。

よく考えてみる。怖いだろ、あんなの。

その気になれば何にだってなる事ができる憲法。憲法内容をちよつと変えるだけで変わってしまい、どんな能力だろうと持つ事が可能なもの。能力も、性質も未知数であり、どこでどういう行動に出るのか、どれ程の力を持つのか分からない。

科学のように理由や理屈があつてこそ成り立つものじゃない。原理も理屈も超越した『魔法』が残した遺物、憲法。

俺にしてみれば、あんなの、怖いさ。

レイズは心の中で呟く。それが自分の正直な感想だ。自分だって魔質という原理も何もない体質を持つてはいるが、所詮それは限られた力だ。憲法なんかとは、根本的に違う。

「さつきも言つただろう。憲法は色々分からない点が多すぎるんだよ。調べなきゃ、いつあいつがどう行動するのなんて分からない。下手すれば世界だつて終わらせられるかもしれないんだぞ！」

「あいつがそんな事するわけねーだろ！ お前馬鹿じゃないのか！」

なかなか滑稽な事を言つたものだとしてレイズ自身思う。しかし、事実は事実で、憲法はどんな力だつて出せる。不可能な事ではない。

それよりも、さも憲法の事をよく知つたように言う番人に、僅かな苛立ちを感じた。何故苛立つたのかなんてこの時のレイズにはよく分かつていなかった。

レイズは逆に番人の胸倉をつかむ。

「お前だつて分かっている筈だろ！ どんなに人間の姿をしていようと、一見ただのか弱い少女のような姿をしていようと、あいつは本来人間としての器なんて持つていない！」

ぎりつ、と番人が齒を食いしはるのが見えるが、レイズは番人の眼光を真つ向から睨みつける。番人が何か言いかけるのを遮るように叫ぶ。

「お前は何でそんなに憲法の肩入れをするんだよ！　もしかしたら、憲法が唯一お前にだけは懐いているからか？　だとしたら、お前は知っている筈だろう！　あいつは……結局お前なんて見ていない！」

「黙れ」

いつもより低い声で唸るように言う番人の言葉を無視する。レイズは、番人の中で恐らく最も危険である地雷を躊躇なく踏みつける。

「憲法は、眼鏡を取った時のお前が！　自らを生み出した魔法使いに似ているから！　なついているだけなんだよ！」

「……………黙れって……………言っただろうが！」

激昂し、自らの胸倉を掴んでいるレイズの手にぎりぎりど爪を食い込ませる。一瞬痛みに顔を歪ませたレイズを、今までとは比べ物にならない程、暗く鋭く冷たく突き刺すように睨みつける。

時が止まったような沈黙。

そして、次の瞬間レイズの腹部を番人は膝蹴りしていた。

「ぐっ」

呻きながら倒れこむレイズを無視し、番人は足元の眼鏡を拾い上げる。俯き気味のその顔は、長い前髪に隠れてよく分からない。

「……………分かっているんだよ、そんな事」

聞き取れるか聞き取れないかの小さな声でそう呟くと、番人は静かに部屋を出て行った。

6・戸惑い

「あの野郎……思いつきりやりやがって」

しばらく開けっ放しになった扉を呆然と見つめていたレイズだったが、腹部の痛みを思い出し小さく呻く。

能力を使わなくともレイズには分かった。あのときの番人は本気で怒っていた。そして自分が何故あも番人にムキになったのか、レイズには自らの事に疑問を持つ。あんな訳の分からない憲法と、さも自分は対等かのように思っている番人を見たから？ 番人が憲法をやけに庇うから？ どれもレイズにはしっくりこなかった。

「何しているんですか。あなた達は」

ふと見上げると、扉のところにアルバがもたれかかって立っていた。呆れたように見下ろすその視線。複数形で言ったという事は、先程出て行った番人の様子でも見たのだろう。

いてて、と呟きながらレイズは立ち上がり、番人に掴まれたり殴られたりした事で乱れた服装を整える。

「ちよつと口論になっただけだ」

「ちよつと、ですか……」

考え込むようにレイズの言葉を繰り返して、アルバは溜息をつく。アルバは、番人や他の裁判官のアシスタントのような役回りをこなす、裁判所調査官と呼ばれる役割に就いている。番人の目を通すべき資料の整理、必要な情報の調査と伝達、それに付け加えて憲法の身の世話といったいわゆる「面倒事」と思われるものが仕事の具体例だ。別に魔質を持っているわけでもない普通の一般人。半年ほど

前から今の立場のようだが、未だに番人に名前を忘れられたりするような扱い。

こいつは、番人に苛立たないのか？ 憲法の事はどう思っているんだ？

レイズはふと疑問になった。能力値が高いから諜報といって自由奔放にも程がある番人行動と、憲法の扱いにくさのせいで、裁判所調査官に就いた連中は次々と代わっている。アルバで何人目だか知れない。普通なら一、二ヶ月、酷ければ十日ほど辞めたがった者もいるらしい。それまでの人間と比べ、明らかにアルバは異質の長さだ。

「よくあんな連中と半年も付き合ってられるな。俺だったら一週間で辞めてるね」

「なんだかんだ言いつつ、あの番人の尻ぬぐいのような役目を買って出ているあなたに言われたくないですね」

楽しそうに笑みを浮かべながら話すアルバに、言いかけた反論の言葉が出てこない。

俺があいつの次に力が強く、あいつよりも常識を備えているからこんな立場になってしまっただけだ。番人の行動が何を引き起こすか分からない為、誰かが番人の行動に注意をしなければいけない。何故か流的にそれがレイズの立ち位置になってしまい、今更誰かにこの仕事を押し付ける気にもなれず、あいつが『憲法の番人』となった時からずっとこんな事をしているわけだ。

「それに、最近はあまり苦痛にならなくなってきたんですよ」

「何が？」

「あの厄介者に振り回される事。番人相手にしている時は敬語を使うのも馬鹿馬鹿しくなって、体裁を繕うのも面倒になって、本気でぶつかっていける。ある意味番人から与えられるストレスは全部本

人に返していると言えますから」

そういえば、とレイズは思い出す。アルバは普段敬語を使うし、仕事もしっかりこなし、礼儀もしっかりしている。いや、それが普通なのだが、番人に対してはまるでどうしようもない友人に正面からぶつかるような口振りと態度。仮にもアルバは番人のアシスタントであり、地位は下の筈なのに。

「番人に追加の資料を届けに来たつもりだけど……この様子じゃ、まだ戻って来なさそうね。それに、気になる事もあったから報告したかったけど……」

僅かに眉間に皺を寄せ、何かを考えるような表情で小さな声で漏らしたアルバの呟きは、レイズにははっきりと聞き取ることはできなかった。

レイズが再びアルバの顔を見る頃には、アルバは既に何でもないような微笑を浮かべていた。

「それでは、私はこれで」

レイズに小さく一礼すると、アルバは背を向けて部屋を出て言った。アルバの足音が徐々に小さくなっていく。レイズはほんの少し、アルバに違和感を覚えたが、ここにも何も無いと思い、部屋を出てボタンと扉を閉めた。

+++

「あの野郎……ムカつく」

腹の中にもやもやとした物が蠢いているような、胸の奥が苦しく

なるような、そんなものを抱えながら番人は最高裁判所内をうろついていた。係員や警備員が番人を見る度、その目に見えて分かる怒りや苛立ちを感じ取り怯えるのを気にも止めず、ただただ色んな所を徘徊する。

『お前は何でそんなに憲法の肩入れをするんだよ！』

レイズの言葉が番人の脳内をぐるぐると廻り続けている。あまりその事について自分でも深く考えた事は無かった。何で？ 理由？ 俺が誰かに尋ねたいぐらいだ。

自分の事が一番分らない。自分の本心が、一番厄介で面倒くさくて扱い辛い。真偽を見極める瞳を持っているから、自分自身を鏡で見れば何か分かるんじゃないかか思っても、何をしようとも、自分自身の本心はずっと分からなかった。

だから、番人は自分自身について考える事を止めた。面倒くさいし疲れるし、何よりどうでもいい。

そう思っていたのだ。

何気なく腕時計に目を落とすと、既にレイズと喧嘩をしてから一時間が経過しようとしていた。一時間も自分は意味もなくあちこちを歩き回っていたのか。

そういえば、憲法は今どうしているだろう。帰って来てから番人はすぐにレイズに説教を食らい、憲法はアルバが部屋へ連れて行っただけだ。憲法の「はにかみ」のせいで驚きだとか戸惑いだとか、そんな色々な感情で支配されていた番人は少しその辺りの記憶が曖昧。

憲法の様子を見に行こう。

大分冷静になった番人は、そう思うと憲法の部屋へと向かって歩き出した。

憲法の部屋の扉を開けると、いつも通り憲法が笑顔で迎えてくれた。しかし、番人はピタリと足を止めてしまった。その憲法の頭に

巻かれている白い包帯を見て。

「お前……！ 何だよその頭の包帯！ どうしたんだよ！」

勢いよく駆け寄り、思わず憲法の肩を力強く掴む。掴んだ肩は、思っていた以上に小さかった。すごい剣幕の番人に、一瞬驚いたような表情を見せたが、すぐにまたいつもの笑顔を浮かべる。

「ああ、これ？ ちょっと転んで怪我しちゃっただけだよ？」

思わず息を呑み、その場の時が止まったような気さえした。

これは、嘘だ。

番人には見るだけですぐに分かる。そんな嘘。しかし、憲法が嘘をつくという事が番人には信じられなかった。憲法には嘘をつくという意思も、発想さえも思い浮かぶ筈がないのに。嘘をつく理由さえ、憲法の中に芽生える事はないから。

現に今まで憲法が嘘について事実や本心とは違った発言をしたことなど、一度たりとも無かったのだ。

「なん、で」

僅かに声の上擦る。目に見えてうるたえる番人を、少し首を傾げつつ微笑を浮かべて見つめる憲法。その姿自体はいつも通りだ。昨日までと同じように見える憲法だが、今日からは決定的に違う。確かな違和感。

番人には普段通りの憲法の仕草さえおかしく思えた。

冷や汗を流しながら無言でいる番人の顔を、憲法は真つすぐ見つめている。口元に笑みを湛えながら。

「……何で、お前が……嘘をつくんだ？」

おそろおそろという感じで番人が掠れた声で絞り出した言葉に、憲法の微笑が少し硬くなる。

「俺に嘘が通じないなんて事、分かっている筈だろ。お前なら」

憲法の青い瞳を、番人の赤い瞳が見つめる。微笑を消し、一見ほんやりとしているような顔をした憲法は、目を伏せてから何かを言おうと口を開きかけるが、また閉ざす。これを数回繰り返している。二人の間になんとも形容しがたい沈黙が再び流れた。

今日は何だつていうんだ、さつきから。

憲法の様子を黙って見つめる番人には、どうしようも無かった。どうすればいいのか皆目見当がつかなかった。憲法の態度に、一挙一動に、変化が表れ始めている。はにかむ事から始まり、嘘をつき、そして今のこの迷っているような、戸惑っているような態度。こんな姿、番人は今までで初めて見た。

「……………い……………か……………ら」

「え？」

ぼそりと小さい声で呟いた憲法の言葉を、もう一度聞き返す。

「心配、かけたくなかった、から」

これはもしかして新手のドッキリなんじゃないかとさえ、番人は思えた。

7・番人とアルバ

あまりの事の連続で、頭に鈍い痛みさえ走ったような気がする。心臓がばくばくと早鐘を打っているのが、憲法にも聴こえているんじゃないかとさえ思えた。この状況についていけない。頭がぐらぐらする。視界が歪む。周りの音も光もおいも何もかもが分からなくなる。自分がどこにいて何をしているのかさえ分からなくなる、そんな気分。

番人は、気が動転していた。

「番人」

憲法の一言で、一気に番人の意識がクリアになる。そこにはいつも通り、特に意味のない微笑を浮かべて座っている憲法の姿があった。ウェーブのかかった水色の髪を揺らしながら、笑う。

「どっかしたの？」

どうしたも何も、お前の方こそどうしたんだ。

そう言いかけた瞬間、憲法の部屋の扉が二人の会話を断ち切るように音を立てて開かれた。憲法に気をとられていた番人は、その唐突な音に驚き体を震わせた。振り向くと、そこには険しい顔をしたアルバが立っていた。

「番人！ ちょっと来て」

「は？ 何で急に」

アルバが一体どうしたというのか、何をそんな顔をしているのか、分からない番人は顔をしかめるがアルバはそんな番人の表情など気

にもとめず、つかつかと番人に詰め寄り腕を掴む。

「待てって！ 何だっというんだよアレイ！」

「アルバよアルバ！ いいから、話したい事があるの」

後半の言葉は、少し小声で言うアルバ。少なくとも、いい話ではなさそうだな。

しかし番人には、憲法の事が気にかかった。変化を見せ続ける憲法。このまま放置しておいてもいいのか。まるで、感情が芽生えているような行動を見せる憲法。番人は、今憲法から離れる気には、どうにもなれなかった。

「番人、早く行ってきなよー。仕事はちゃんとやらなきゃ駄目だよ？」

無垢で純粹そうな、そんな本当に真っ白な笑顔を向けられながら手を振られ、アルバに連れて行かれないように踏ん張っていた足の力が一瞬抜けた。そのせいで転びそうになりながらも、結局アルバについていく羽目になってしまった。

番人の控え室へと、アルバが番人を引き摺って行く。後ろでどれだけぶつぶつ文句を言っても、腕に込められた力が緩められる事はなかった。一見ただの華奢な美人だが、どこからこの力は出てくるのか。

部屋に入り、ひとまずテーブルを挟んで向かい合ってソファに座る。

「おいおいアレイ。一体何だっ……」

「番人、今日憲法の行動で妙なところは無かった？ まるで、意図や感情があるような行動をとらなかった？」

名前の間違いに対してのツッコミも入れずに投げかけられたいきなりの質問に、番人は息がつまるような思いになる。レイズが報告したのか？ いや、それだったらそもそも質問をしてくるような事はないだろう。

反射的に口を閉ざしてしまった番人を見て、アルバは「やっぱりね」と小さく言う。

「やっぱりって何だよ？」

「今日、あなた達が帰って来てから、あんたが憲法を連れ出したせいで出来なかった今日の検査があったのよ」

検査と言うと、つまりは憲法について研究をするためのデータ収集をしていたという事だろう。出掛ける前に自分が関係者を締め上げていた事が脳裏に浮かぶ。

「その時、憲法が検査を嫌がって暴れたらしいの。あの頭の包帯は、憲法が暴れた時に転んで机の角で頭を打っただけらしいわ」

「は」

また新たに分かった、憲法の今までにない行動。これまでの研究で、憲法が逆らう意思を見せた事など一度もなかったのだ。検査があると言われても笑顔で、検査が終わっても笑顔。

次々と表れているこの憲法の行動は一体何を意味するのか、番人には全く見当もつかない。ただ、これだけははっきりと言える。

憲法は、本来持ち得ない筈の感情や意志を持ち始めている。

改めてその事を認識し、番人はなんとも言えない複雑な気分になった。以前から憲法がただの「物」のように扱われる事は不愉快に思っていたから、この憲法の変化は悪い事ではないのかもしれない。一見ただの純粋な少女に見える憲法が不気味がられ恐れられていた

のは、憲法の持つ能力が絶大すぎるというものもある。そしてもう一つ、感情や意志を持たない故に、どこで誰が死んだという事を知ろうが、目の前で何が起ころうが笑っていた、という事実が過去にあるからだ。

聞いた話によると、体をばらばらにされるといふ殺さ方をした、誰もが目をそむけたくなくなるような死体の写真を見せられても、顔色一つ変えなかつたらしい。また、今の番人以前の『憲法の番人』が死んだという事実を聞いても、笑顔を浮かべていたとも聞く。

人は簡単にその話を鵜呑みにし、憲法は不気味で恐ろしいものというイメージを植え付けられている。感情も意思もない、人の形をしているだけの物。

だから憲法が人間と同じように笑ったり泣いたりすれば、もう少し周囲の人間も憲法に対して親しみを持てるのではないか。人として扱って貰えるんじゃないか。受け入れて貰えるんじゃないか。番人は確かにそう思っている筈なのに、微かな不安が心の中に居座り続けているのに気付かない振りをしている。

感情を持った憲法は、どうなってしまうのかという不安が。

「それで、研究員も憲法には感情が芽生え始めると結論付けたみたいよ。また今後、色々と検査していくみたいだけど」

「……お前はどこまで憲法の検査について関与しているんだ」

「大雑把な話しか聞かされないわよ。あくまでも私の仕事は、憲法の生活での手助けがメインとなっているから。けれど」

ばさつとテーブルの前に資料が置かれる。細かい字がびっしりと書き込まれ、グラフ、憲法の写真なども載っていた。番人はそれに目を向けるものの、専門用語が多くはいかにも面倒くさそうに感かして、五秒で読むのは断念。

「何だこれ」

「憲法の感情について今までの研究結果らしいけれど、どれも結論に至ってはいない。憶測の域を出ていないわ」

「どこから持ってきたんだお前」

「ちよつとね」

ちよつとね、つてお前。

思わずアルバの顔を凝視するが、当人は何でもないような顔でテーブル上の資料を見つめている。こないかにも綿密そうなデータ、アルバの立場で提供させてもらえるとは思えない。

となるとアルバはこのデータを……。

そこまでで番人は考える事を止めた。詮索しても別に意味がないだろう思ったから。どうせ自分も好き勝手やっている人間。言える立場ではないし、それよりも「憲法の感情」というキーワードが番人は引つかかる。

「番人は憲法が出てくる童話のようなもの、読んだ事ある？」

「何だ急に。……あるけども、それがどうかしたのか？」

大分前にこの最高裁判所の書庫室にて読んだ事がある。それがいつ誰によって書かれたかは分からない。あの童話に出てくる憲法が実際の話に基づいているのかも非常に曖昧なものだとは知っている。しかし、アルバのこの口振りだとあの童話が関係あるというのか？

「非常に曖昧で物語の内容が事実かどうかも分からないものよ。けれど、童話でも憲法は感情を持った。そして、憲法に反する行動を取った……。もしかしたら、今の憲法もそうなるかもしれない、という仮説は立てられているわね」

「憲法内容に反する行動を取る？ けれど、今の憲法の力や行動に影響を与えているのは『平和主義』と『平等』だろ。その逆の行動

をするようになるかも？」

馬鹿馬鹿しい。

吐き捨てるように番人は言い放つ。あの話を元にするのなら、憲法は感情を持ち、そして誰かを殺して血を浴びる事が「嫌だ」という意思が芽生えたんだらう。ただ憲法内容と反対の行動をとったのとは少し意味が違う。

そもそも番人には、今の憲法が意思や感情を持った所で、誰かを殺すようにも傷付けるようにも思えなかった。

ただの一人の少女になるだけ。それだけだ。

「別に真逆の行動をするなんて言っていないでしょ。けれど何が起きるか分からないから、いつも以上に憲法を見張っておいてよ」

「俺はアイツを見張っているつもりじゃないんだがね」

「そういう事じゃないの。憲法の行動に注意を払うようにして欲しいだけよ。それとも一つ。これは憲法本人とは少し離れるんだけど」

さらにファイルを漁り、数枚の資料をアルバが取り出してきた。

「霊媒体質、って言葉聞いた事はある？」

「れいぼうたいしつ？」

「霊媒よ、れいばい。簡単に言えば幽霊とか言われるものに関わりを持てる体質。そんな感じの魔質を持った子供がいるみたいなのよ」

「へえ」

幽霊、ねえ。死んだ人間の魂とか言われたり言われなかったり、いるのかわないのかハッキリとされないものだが、そんなもんと関わる魔質もあったのか。

アルバが憲法の研究データの上に、さらにその資料を重ねる。

「魔質についても解明されていない事が多くて、なんとも言えないけれど……この子供を使つて、憲法が生きていた時代の人間から情報を得られないかと私は思うのよ」

「……はあ？」

思わず間抜けな声が漏れる。なんだか今日はアルバに対して短い言葉で返している事が多い気がする。

眉をひそめている番人の様子など意にも介さず、アルバは少し得意気な顔になつて話しを続けた。

「この魔質の子を見つけたのはほんのたまたまよ。知り合いのそのまた知り合いの子供がどうやらそういう魔質らしくてね。この事は研究員たちにはまだ伝えていないわ」

「何で俺に？」

反射的にそう尋ねる。番人に対する態度はともかく、それ以外の仕事は真面目にこなし、番人と違い礼儀正しくルールにも従うアルバの事だ。レイズや他の人間と同じように、憲法の詳細を知るための手掛かりはまず研究員に、という思考のものかと番人は思っていた。先ほどの資料といい、なんだか番人の中にある彼女のイメージとは行動が噛みあっていない。

「単純に興味があるのよ。あなたの憲法へのその『人として扱われて欲しい』という強い気持ちや、色々な想いに。半年しか関わっていないとはいえ、あなた以外の人間とあなたの憲法への想いは違い過ぎる。それがどうしてなのか、どういう行動を起こさせるのか……」

「…ね」

グロスがひかれた整った唇が弧を描き、小さな笑い声が漏れる。優雅な雰囲気ながらもいたずらを仕掛けた子供のような無邪気さが垣間見える微笑。番人は、ああコイツ結構美人かもな、さっきまで俺をぐいぐい引っ張って歩いていた女には思えないくらい。なんて一瞬思たりもした。

「つまり俺等はお前の興味の対象になっちゃったわけかよ……それにしてもよくそんな事堂々と言えるな」
「だってあなたに質問されたら、どんな上手な嘘で返しても無駄じゃない」

その言葉に、番人は小さな笑い声を洩らした。

ああ、確かにそうだ。その通りだな。間違いなくお前はこれまでの裁判調査官の中で唯一の俺の扱いを心得ている奴だぜ、アルバ。

番人はしっかりとその霊媒体質な魔質を持つと言う人間の資料を受け取った。

8・番人とレイズ

その夜、番人はソファに寝転がり天井を見上げていた。デスクの上にあるランプが、暗闇の中にオレンジ色の光を浮かび上がらせている。

テーブルにはアルバに貰った資料と眼鏡が無造作に置かれている。一通り目を通したが、特に気になる情報は無かった。金持ちでも何でもなく、むしろ貧しい方の家の子供らしい。父親のいない、母子家庭のようだ。

魔質については、本人や家族が自覚したのが最近という事もあり、アルバの言うように詳しい情報は不明のようである。直接会えば、何か分かるだろうと番人は結論付けた。

母子家庭。その単語で昔の番人の記憶が脳の奥底から引つ張り上げられる。同時に、当時の感情のようなものでさえ引きずり出され、番人は喉の奥が締められるような吐き気を催すような嫌な気分になった。

頭に浮かぶ、過去の情景。

くもの巣が張り必要最低限の家具しか置かれていない、いかにも貧相な家。そこにいた自分と、たった一人の家族だった母親。気が付いたら消えていた母親。

突然引き取られ何も知らずに、いや、気付かないふりをして、自分を無理やり納得させて最初は過ごしていた孤児院。

自分の魔質が何なのか分かった瞬間。言い逃れができなくなった現実。

過去の見ていた光景が一瞬のうちに駆け巡り、そして消えていく。あの時から自分は、人を信じる事を止めてしまったように思える。信じるって何だよ。母親は必ず戻ると信じていたガキの頃の自分は何だっていうんだよ。

「……アホらし」

体をもぞもぞと動かし、顔をソファの背もたれに顔を埋める。一応シャワーは浴びたものの、どうにもさっぱりしない気分이었다。ふと、レイズに言われた極力思い出さなくてもない言葉が再生される。

「眼鏡を取った時のお前が！ 自らを生み出した魔法使いに似ているから！ なついているだけなんだよ！」

そつだ。確かにその通りさ。自嘲する様に番人は番人に言い聞かせる。

番人が「憲法の番人」と任命されて憲法の存在について教えられ、初めて顔を合わせた時。

乏しい感情表現の中で驚きの顔を確かに見せて、憲法はすぐに番人の足元へ駆け寄ってきたのだ。「リーチャー？」と、聞いた事もない名前を呼んで番人の元へ近付いてから、じつと番人の顔を眺めて笑顔を浮かべた。

人違いだったと言って、それからいきなり番人の手をしっかりと握りしめた憲法の姿を番人は思い出す。あの時の自分も、今日の自分のように戸惑っていた。手を握ってきた瞬間、憲法がどういった顔をしていたかも覚えていない。

後に当時の裁判所調査官に、自分は憲法を生み出した魔法使いと外見が似ているのだらうと知らされた。

憲法がああも「憲法の番人」に興味を示したのは初めてだったようだ。自ら寄っていく事も、ましてや手を握るなんて真似は初めての行動。研究者達は、やはりいくら憲法内容に沿った人格や能力を持つとも、自らの親とも呼べる魔法使いだけは特別なのではないかという結論へ至った。そして、その魔法使いに似ている憲法の番人も、憲法の中では少し他の人間とは違うように映ったのではないかと。

それ以来、番人は目も悪くないのに眼鏡をかけるようになった。自分が他人に似ているというのは糺に感じたから、というのもあるだろう。

そこまで思い出したところで、番人は過去を取りだすのを止める。今日は色々とありすぎた。疲れているのか知らないが、これといった特にならない事ばかり頭に浮かぶ。

寝よう。

目を閉じて何も考えないでおく。考えても何か変わるわけでもない。考えなければいけない場面がきたら、その時に頭は動かす。今は寝よう。

無理やり全ての思考をシャットアウトし、番人は眠りへとついた。

+++

翌朝、番人が裁判所から出て喫茶店で簡単な昼食を取り、資料を持ちこ部屋へと戻った時だった。資料を鞆につめ、部屋から出て廊下を歩いていると、向かいからレイズも歩いてきたのだった。視線が合い、反射的に両者とも足を止める。

少し気まずそうな表情を浮かべ、スーツのポケットに手をつっこんだりと落ち着かない様子のレイズと、なんだかこのまま進む気にもなれずになんとなく立ち止まった番人。

しばしの沈黙が流れる。

なんだよこの小さい子供が喧嘩して、その翌日に謝るタイミングを見計らって何も言い出せずにいるみたいなの雰囲気。あながち間違っているとも言えないけども、仮にもいい年した大人がこんな雰囲気になるなんて妙なものだな、なんて自分の普段の子供のような行動を棚に上げつつそんな事を考える番人。

いつまでもこの状態にいるというわけにもいかず、番人が口火を切った。

「あー、そうだ。俺は今日用事があるからな。土曜日で裁判もないし、特に問題は無い筈だろ？」

「確かに問題はないが……用事って何だよ？」

怪訝な顔をされる。別段親しい友人がいるようにも見られず、基本的に最高裁判所内をうろつき、憲法の面倒を見ている事の多い番人が休日に用事があるなんて事に、レイズには違和感を覚えたようだ。

しまった、その場しのぎで妙な事を言うんじゃないかと番人は心の中で舌打ちをする。

あーとかうーとか適当に言葉を濁しつつ視線を空中へ彷徨わす。

「えーとだな……その、アレだ、孤児院の知り合いに会ったよ。そういうわけで、すぐに戻るから。じゃあな」

右手を軽く上げてレイズの横を通り抜けようとしたが、その手首をがしつと掴まれる。振り返ると眉間に皺を寄せているレイズが視界に入る。

「嘘ついてんじゃないよ。魔質を使わなくても分かるくらいだ。…
…憲法のところには行かないのか」

普段よりも少し低く、訝しむような口調で尋ねられたその一言に番人は固まる。

「憲法に関係してるのか？」

掴まれている右手を思いっきり振り払い、レイズを睨みつける。無表情のレイズが何を考えているのか、番人には知る術などない。

「お前には関係ないだろ」

「いや、関係あるね」

「ないだろ！ これは俺とあいつの問題……」

そこまで言いかけたところで力強くネクタイを掴まれる。昨日と
いい今日といい、一体自分はどれだけ掴みかかったり掴みかかれ
たりするんだろうか。

しかし、行動に反してレイズの口調はひどく静かだった。しかし、
強い光が宿る瞳。

「いいか。お前にとっては確かに自分と憲法にしか関わらないかも
しれない。けどな、第三者の俺たちにとっても決して無関係とは言
えないんだ。自分自身気付いていない訳じゃないだろ。お前が憲法
に与えた影響を！」

自分が憲法に与えた影響。番人は頭でこの言葉を反芻する。自分
は、あの憲法に、何かを与えていたのだろうか。

「憲法がこれまで『憲法の番人』に興味を示したのなんてお前が初
めてだ。お前があいつと買物に行つて、あいつの表情に変化が現
れた。行動にも意思が芽生え始めた。お前の行動によって、憲法に
変化が表れ、俺達には動揺が走るんだよ」

静かだけれど力強くレイズは言い放ち、番人のネクタイから手を
離す。番人は何も言わずに、ただ黙ってレイズの言葉を受けている
だけだった。

「感情によって憲法がどうなるか分かったもんじゃないから、俺達
は怖いんだ。お前は、ただ単に一人のガキと関わっているだけじゃ

ないだ！ 国の最高機密であり不透明な部分も多い、未知のものを扱っているんだぞ！」

一気にまくしたて、レイズはハツとしたように口を噤んだ。昨日も似たような口論をしたばかりだと思い返したのだ。てつきり何かしら反論があるかと予想したレイズだったが、番人は相変わらず無言でレイズを見つめているだけ。レイズにしてみれば何十分にも感じた数秒間、無言でいた番人はくるりと背を向けて歩き出す。

「お、おい番に……」

「そうだろうな。お前等にしてみれば『分からない』ものが怖いし不安なんだろうな。……けどさあ、何でそんなことごとく何かが起こる事を恐れるんだ？」

レイズの言葉を遮り、再び立ち止まると視線だけをレイズの方へ向ける。その瞳は怒っているわけでもなく、悲しんでいるわけでもない。淡々と番人は言葉を紡ぎ続ける。

「感情を持って、何だ。さらに特殊能力でも目覚めるのか？ 暴れ始めるとでも言うのか？ 違うだろ。ただの一人の人間と同じになるだけだろ。俺やお前と同じような」

真つすくなその言葉に、レイズは言葉に詰まった。

何でこいつは、どうしてこうも。

「お、お前に不安はないのかよ！ なんでそんなに……」

「正直、不安がないわけじゃねえよ。お前の言う事だつてさ、同意できないわけじゃない。でもさあ……それでもさ」

くるり体をレイズの方へ向ける。自分がどんな表情をしているの

か、番人本人にはよく分からない。

自分の憲法に対する感情。怖れがないとは断言できない。自分が何故こうも憲法の事を考えれるのかはつきりとは分からないし、分かるうともしていない。憲法が自分に対して、少し特別扱いしているからかもしれない。それに優越感を覚えているのかもしれない。単なる同情かもしれない。気まぐれなのか、好奇心なのか、大した理由じゃないかもしれない。

それでも、番人はただ一つ揺るぎないものはあった。

憲法は、自分が守りたいと思えるものだ。いや、守るという大層なものじゃなくてもいい。理屈はともかく「傷つけたくない」と、そう思える存在だった。

「俺にはあいつが、妙な行動起こすようには思えねーんだよ」

呆けたようなレイズの顔を尻目に、再び背を向けて番人は歩き出した。今日知ることになるかもしれない、本当の憲法の過去がどんなものか不安な気持ちはある。あの童話を思い出す限り、決している過去を持っているとも思えない。自分はどんな感想を抱くのかも想像できないし、したくないとも思う。

怖いに決まっているだろ。今まで散々憲法の肩を持ってきた癖に、今日でそれが崩れるかもしれないなんて思ってしまう、自分の弱さが。

どっちかと言えば俺にしてみればそっちの方が恐怖だね。

それに、憲法が感情を持つことによる変化に対する不安よりも、さつきレイズへ言った想いの方がよっぽどでかいんだよ。

あいつが誰かを不幸にするような事にはならないだろう、ってな。

小さくなっていく番人の背を見て、レイズは深い溜息をついた。

「それってつまりところよ……憲法を信じてるって事じゃないか。あんな今まで見た事もないような優しい笑顔浮かべやがって」

取り繕っている様子なんて微塵もない表情が脳裏に焼き付いている。

苦笑しながらレイズも番人に背を向けた。

9・魔質かそれとも

最高裁判所構内から出て、番人はかばんから地図を取り出した。問題の魔質を持っている子供の家までの道のりが、丁寧に書きこまれてあった。

石畳によって整備された道のりを、地図とにらめっこしながら進んでいく。今日向かう家は街の中心より僅かに離れた所に位置している。ここからなら歩いて四十分程で到着できるだろう。

相手にはアルバから連絡が入っていて、今日の十時頃に番人は訪ねる予定だった。歩きながら、番人は先程のレイズとのやりとりを再生する。

「ごちゃごちゃしていた気分が、あのやりとりのお陰で自分なりに整理がついた気がする。」

昨日は色々ありすぎた。今までは比較的波風の立たない、淡々とした日々だったのに。

裁判で有罪になった人物に死刑と告げてレイズに怒られたり、憲法改正を持ちかける連中を一掃したり、憲法のころころ変わる意思や行動に付き合わされたり。

まるで今までの総集編のように、出来事の断片が脳裏に浮かび上がってくる。今日で全てが変わる、そんな予感のようなものを番人は感じた。

歩き続けて到着した家は灰色のレンガ積みで、どこかごぢんまりとした家。家の周りで視界に数軒入る他の家は少し遠く、十センチ程度の高さに見える。

一息つきながら玄関まで歩いていくと、妙な緊張が全身に走る。おかしいな、俺は緊張なんてそうそうしない性質の筈だぞ。落ちて着け落ちて着けと自らに言い聞かせるも、心臓が早鐘を打っているのが分かる。もう一度息を吐き出し、さあ行くぞと番人が身を引き締め

たその時。

唐突に、目の前の扉が開かれて文字通り番人は面食らった。つまり顔面に勢いよく開いた扉がぶつかったという訳だ。

「えっ、ご、ごめんなさい！ 大丈夫ですか！」

「……ま、まあ大丈夫です」

突然の出来事に驚けばいいのか怒ればいいのか、鼻の痛みに悶絶すればいいのか、眼鏡のフレームが曲がってないか確認すればいいのか、どうリアクションをとったものか番人が分からなくなっていると、扉を開けた女性が「あら？」と声を発した。

「もしかして、あなたがアルバさんの言っていた方でしょうか？」

「へ？」

「青い髪、赤い瞳、スーツに眼鏡……あなたが、私の息子の魔質に関心がある方ですね？ 私はセシリア・バートンと申します」

綺麗な金髪の髪をなびかせ、身に纏っているのは山吹色であまり装飾も施されていないシンプルなワンピース。肩にはクリーム色のスカーフがかかっている。彼女、セシリアは柔和な微笑みを浮かべながら、家の中へと手招きをした。

「確か、亡くなられたご兄弟がいたので私の息子の力を借りたい……と昨日アルバさんから伺っていたので。まさか今日いらっしゃるとは思ってもみませんでした」

「あ、まあ、はい」

どうやらアルバが適当な理由をでっちあげてくれたようで、話がスムーズに進む。憲法の事を一般市民に話すわけにもいかないもので、どうしたものかと少し番人は気にかけていたのだ。

何の疑いもなく、番人の兄弟が死んだという話を信じているセシリアは面持ちを暗くさせているが、ありもしない話でそんな表情をさせてしまっていると思うと、番人は何とも複雑な気分である。

番人を応接間に通して紅茶をいれる彼女に、番人は「お構いなくとぶつきらぼうに言った。どうにもこういう空気というか、雰囲気は慣れていない。」

「辛いですよね、身近な方が亡くなるのは……私の夫も半年ほど前に他界しました」

いれたての熱い紅茶を冷ましながら少しずつ飲んでいる番人の近くで、セシリアは聞いてもいないのに静かに語りだした。嘘とはいえ家族が亡くなったという事になっている番人に、過去の自分を重ねてしまったのかもしれない。

「けれど、その時に息子の魔質が分かり、そしてあの子の魔質を通して私は夫の想いを受け取る事ができました。夫が事故で死んだ時私はどうすればいいか分からず、自暴自棄になりかけていましたが……あの子がいたことと、あの子の力のお陰で私は救われた気がします」

当時の心境を思い出しているのだろうか。セシリアの切なげに瞼を伏せ、憂いを帯びた笑み。番人は、何も言わずにただその話を聞いていた。

はっとしたようにセシリアは顔を上げ、口元を押さえる。

「ご、ごめんなさい！ こんな私の身の上話なんて今は関係ないですよ。少し待っていてください。今息子を呼んできますね」

少し顔を赤らめ、慌ただしくセシリアは部屋を出て言った。その

様子を眺めながら、番人は紅茶のカップをテーブルの上に置いた。
なんだかなあ。よく分からない罪悪感というか。そんなものが胸の奥につつかかっているというか。俺なんかが聞いて良かったような話じゃない気がするというか。

どうにも複雑な心中になっていると、再び扉の向こうから足跡が聞こえてきた。扉が開かれると、そこにはセシリアの金髪とは似ても似つかぬ、黒くてわずかにあちこちが跳ねた髪と、赤い瞳をもった子供がそこに佇んでいた。見知らぬ人間である番人を見て、どうすればいいのか戸惑っている。身長や顔立ちからして、十歳かそれより少し年下だろうと番人には思われた。

「こちらが私の息子、ルナス・バートンです」

不安げなルナスを落ち着かせるかのように、セシリアはしゃがみこんで後ろからルナスの肩を抱いて笑顔を向けた。母親の顔を見てほっとしたのか、固くなった表情を少し緩めるルナス。二人は、番人の座っているイスとテーブルを挟んで反対にある、白いソファに座った。

「ルナスは亡くなった方の思い出深いものや、長期間身に着けていたものに触れる事で、その人の生前の想いや感情を読み取る事ができるのです。例えばその人の身に着けていたアクセサリーや、日記や書物からも読み取れるようです。いえ、読み取るというか……」

言葉を選ぶようにセシリアは少し間を置く。

「まるで、その亡くなった本人のようになると思いますか……。その人の魂が、ルナスに乗り移っているかのようなんです」

「乗り移っている……ですか」

「はい。この子が夫の書いていた日記に触れた時、ルナスの雰囲気

や話し方がまるで夫のようになりましたし……。姿や声、雰囲気まで夫のものと同じになっていくようで、まるでそこに本人がいるかのように感じられるのです。私と夫は会話も出来まして、ただ相手が生前の想いを語るだけではありませんでした」

姿、声、雰囲気まで別人のようになるし、会話もできる？ 番人は眉を寄せた。

魔質というのは、あくまでも「特殊な体質」とされていて、自らの五感に繋がりがある特殊能力が多い。番人のような嘘か本当か見極める力は、視覚に繋がっている。遠くまで声を聞く事ができる力、触ったものの過去が少し分かる力や、少し特殊なものでいえば自分の体と他の物の間に流れる静電気を操作できる者もいるらしい。いずれも力の大きさに多少の差はあるが、少なくとも他者の感覚にまで作用する魔質は今の所報告されていない。

しかし、このルナスの魔質は、魔質というにはあまりにも影響力が大きすぎる。声、姿まで違って感じられるという事は、他者の感覚にも作用する新しい魔質なのか、それとも……。

魔質以上の力、『魔法』なのか。

一瞬番人の脳裏に浮かんだその結論。魔法を使える人間が一人もいないと確定しているわけではない。ただ、いるかどうか曖昧とされているだけ。ありえない話じゃない。

「どうかされましたか？」

セシリアの声に自分の世界へ飛んでいた番人の意識が引き戻された。

今はこのルナスの力が魔法なのか、魔質なのか。それは大した問題じゃない。どちらにせよ、どんな原理で働いている力なのか分からない、という事に変わりはないのだから。

「すみません。続きをどうぞお願いします」

ひとまずこの問題は保留にすることにし、話の続きを促す。しかし、セシリアは眉を下げて申し訳なさそうに声を発した。

「ごめんなさい。これ以上の事は分らないんです。私もこの子の魔質が分かったのは、二ヶ月ほど前の事なので」

「そうですか……」

たしかにアルバから貰った資料をざっと読んだ限り、この家の住所や家族構成といった、そういった「どうでもいい」事は分かっているが魔質の詳細までは不明のようだったし、今分かる情報はこのくらいが限界なのだろう。アルバも本来ならばもう少し調べてから、この事を自分に話すつもりだったのかもしれない、と番人は考えた。「死んだ人間に縁のあるものに触れると、この子供がまるでその「死んだ人間」のように話し、姿を変えているように見える。それは、死んだ人間の魂を再びこの世へ呼び戻していると言ってもいいだろう。」

もうこれは、賭けてみるしかない。最高裁判所の離れにある書庫室に、憲法の童話があったはず。その童話に触れれば何か分かる可能性は決してゼロじゃないはず。

番人は立ち上がる。セシリアと、その隣で落ち着きなくそわそわした様子で座っているルナスが顔を上げる。

「すみませんが少しの間、お子さんをお借りしていいでしょうか？」

決意を秘めた瞳で、番人は言葉を発した。セシリアは番人の顔をほんの数秒、無言で見つめてから「分かりました」と、笑顔で頷いた。

10・巡り合い

セシリアも、ルナスの手をひいて立ち上がった。いまいち状況が理解できていない様子のルナスに語りかける。

「ルナス、この人はあなたの力を必要としているの。またお父さんの時みたいに、お願いできる？」

「……でも、おれ、あの時よく分からないまま色んなもの頭に流れてきて……わけわかんなくて」

「それでいいの。何かすごいことをしようって考えなくてもいいのよ。きつとあなたの体に宿っている力がなんとかしてくれるわ」

セシリアは温かみのある優しい雰囲気を感じながら彼の頭を撫で、番人へ視線を移す。

「玄関までお送りしますね」

ルナスの左手をしつかり握り、親子は部屋を出て玄関へ向かう。番人もその後ろへ続いた。親子の後ろ姿を見る番人の顔は少し寂しげにも見えたが、それに気付く人などこの場にはいない。

三人が外に出ると、先ほどよりも空が暗い。天気移ろいやすい今の季節。少し雲行きが怪しくなっていた。

「お母さんは？」

ぎゅっとセシリアの手を掴んだままのルナス。セシリアはちらりと番人の方を見る。セシリアが言葉を発する前に、番人が口を開いた。

「すみません。できればその、えーと、俺一人にさせていただきたいのですが」

もしかしたら無理かもしれない。いきなり会ったばかりの人間に子供を預けるなんて。

しかし、そんな番人の心境に反してセシリアは頷いてみせたのだった。

「ええ。かまいません。アルバさんから『兄弟に会う時は、一人にしてやって欲しい。子供に何かあつたら私が責任を持って対処する』と聞いていますし、あなたを信用します。それに私にはその気持ち、なんとなく分かりますから……。ご兄弟と少しでもお話できると思いますね」

アルバに心の中で礼を言いながら、番人はセシリアに頭を下げる。まごついているルナスの背中をセシリアが押すと、おずおずと番人の方へ歩み寄ってきた。そんなルナスの視線に合わせるように番人はしゃがんだ。

「ちよつとだけ俺に協力してくれ。な？」

怖がらせないように目を細めながら、握手のつもりで番人は手を差し出す。番人の顔と手を二、三度交互にみてから、そつとルナスはその手をとった。握手は終わったと思えば番人は手を離そうとするが、ルナスは離す素振りがない。

もしかして手を繋ごうとしていると勘違いされたのか。……まあ、いいか。

手を繋いだまま番人は立ち上がると、再びセシリアに軽く頭をさげて、親子の家を後にした。

二人で歩き続け、番人は再び最高裁判所へと戻ってきた。

途中でルナスが疲れたように座りこんだので、おぶってやるうかと言ってみたが彼は決してそれを受け入れなかった。けっこう意地っ張りな奴だ。

おそらく初めて見るであろう建物、最高裁判所を見て不思議そうにルナスは首を傾げた。

「にーちゃん……こんな変わった家に住んでるの？」

「ちげーよ。ここに、アレだ。俺の兄弟に関わるものがあるの」

「ふーん……」

やはり変な感じがするのか納得していない口振りだったが、今それについて詳しい説明（という名の言い訳）をしている場合ではない。最高裁判所の正面から入るわけではなく、憲法を大市に連れて行った時に使った裏門から入った。中庭の隅の方、少し古びた造りをしている薄い焦げ茶色の建物。古い書庫室だ。扉の前まで歩き、鍵を開けて中に入ると予想以上に埃っぽかった。ルナスは隣で咳をしている。

「大丈夫か？」

「う、うん。こんなところにあるの？」

「ああ。ちょっとここで待ってる」

決して広いとはいえないスペースにたくさんの本棚がところせましと並び、本棚の近くにあるいくつかの机には何冊もの本が積み重なったままで埃をかぶっている。ここは今は殆ど使われていない。古い資料や書物がとりあえず保管してあるだけで、新しい物は裁判所内にある図書室に保存されている。部屋の隅に申し訳程度に窓が取り付けられているが、天候の影響もあり薄暗い。

とりあえず本棚の近くに放置されていたランプをつける。

さて、例のあれはどこに置いてあったかな。

番人は記憶を辿りながら本棚の背表紙を眺めるが、それらしきものは見当たらない。本棚から離れ、机の本を手当たり次第に探してみると。

「あつた！」

茶色くくすんでしまった薄く古ぼけた本。この国のいくつかの童話の中で、明らかに異質な物語が記されている本。まるで他の童話たちはあの「憲法の物語」をカモフラージュするためにあるのではないかと思ってしまう。

しかし、改めて番人は不安になった。

もしかしたら関係無い童話の作者の魂を呼び出してしまうだけじゃないか。いや、憲法の話を書いた人間が詳しい話なんて何も知らなかったら。ルナスに手渡しても何も起きないかもしれない。

いや、でも決めただろ。とりあえず、こいつとあいつに賭けてみるって。

本を片手に、入口の前で待っているルナスの元へ戻る。ルナスにもう少し中へ入って扉を閉めるように言う。念のため鍵もかける。途中で誰かがやって来たらたまったもんじゃない。

ランプを足元に置いて、番人はルナスに本を手渡した。

狭い書庫室を支配する沈黙。

だめかと思つたその刹那、ルナスの体からぼうつと青白い光が滲み出てきた。最初はぼんやりとルナスを照らし出していたそれは、一瞬に輝きを増して範囲を広げる。

同時にどこから入っているのか分からない風が部屋中に広がった。散乱している本のページが、何かの資料が、風によって舞い上がる。同時に埃も舞い上がり、番人は思わず咳き込む。

そして顔を上げたその瞬間。

青白い光を身に纏ったまま目を閉じているルナスの姿がそこにあった。ゆっくりと瞳を開けると、急に何かに驚いたように体を震わす。

「ここは……？ 僕は一体……？」

そう呟いた言葉は、まるでルナスの声に別人の声が被さっているようだった。幼い姿のルナスにはミスマッチした男性の声。エコーがかかっているようにぼやけて聞こえる。

間違いない。これは、あの本に関わった誰かが、ルナスの体を借りてここに来ている。セシリアが言っていたように姿まで変わっていないが、声は明らかに違う。

そう認識した瞬間、番人の体に緊張が走った。部屋が閉め切つてある事に関係あるか否か、番人の体から汗が滲みだす。

ルナスであつて今はルナスでない彼は、あたりをきよるきよるとしながら訝しげに番人を見つめていた。番人は躊躇いつつも一歩踏み出し、目の前の男を見据える。一見するとそれは、睨んでいるようにも捉えられた。

まずはあの憲法の物語を書いた人物かどうなのか、それを確認しなければ。

「なあ、あんたはもしかして『憲法』についての物語を書いた人か？」

「なっ……なに、を言って！」

『憲法』という単語が出た瞬間、肩を震わせうろたえるルナス いや、この反応は、おそらくあの物語の著者なのだろう。

ルナスの姿の彼は「違う」と言いかけて閉口したり、何かを再び言いかけてまた止める。じっとその姿を見据える番人に、やがて観

念じたかのように先程よりも少し落ち着いた口調で喋り出した。

「……た、たしかにそうだ。僕があゝの憲法の物語を書いた。……君は誰だ？　ここは一体？　何で僕はこんな所に」

番人に対する警戒心を露わにしながら一気にまくしたてる彼の言葉を遮り、少し語気を強くして番人は言い放つ。

「ここはあんたが死んだ先の未来さ」

瞬間、彼は息を呑み番人に番人を食い入るよう見つめた。しかし驚愕を浮かべていた表情を一転させ、今度は首を傾げながらまじまじと番人の顔を見上げる。

妙な視線に番人は不審げな視線を返した。

「なんだよ」

「いや、なんでもない。ただ、君の顔が知り合いに似ている気がする」

気まずそうに番人から彼は視線を逸らした。

反射的に番人の脳裏に浮かぶのは、憲法と最初に会った時のこと。自分の顔を見て誰かの名前を呼んだ彼女の姿。即座に番人は理解した。彼が誰と自分を似ていると思っているのかを。

眼鏡を外し、不敵に笑ってみせる。案の定目をぱちくりさせて彼は固まってしまった。

「まさか『憲法』を生み出した魔法使いに似ているとか言うんじゃない？　ねーよな？」

「な、一体、君は……！！」

「諸々の事情は今から簡単に説明するから、質問タイムは後でな」

大雑把に番人が憲法の現状、『憲法の番人』という立場、ルナスの力について説明をする。説明が終えた時、彼は複雑そうに眉を寄せていた。傍から見れば子供が何をそんな難しい顔をしているのかと思われるだろう。

「そうか。じゃあ君は、僕が知っている『憲法』に関わる事を知りたいのか」

「ああ。憲法の事も、そして憲法を生み出した魔法使いについても知っているんだろう？」

ルナスの姿をした彼の足もとに落ちている、あの本を番人は拾い上げた。番人は眼鏡を外したままの裸眼で、射るような視線を向けながら語りかける。

「俺は知りたいたんだ。百年前だか二百年前だか知らないが、その頃の戦争で戦っていると言われていた憲法について。あいつの過去を。あいつの力を。あいつが、どんな奴だったのかを」

番人の言葉を聞くと「そうか……」と言いながら彼は深い溜息を吐きだした。そして、困ったような安心したような、そんな笑顔を浮かべた。

「いいよ。僕が知っている限り全てを話そう。それが僕の役目だろうから。僕が……『憲法』が生まれる事になった、全ての発端だから」

11・語り出し

思わず番人は目を見開く。「どういうことだ」と言う前に、彼が続きを語りだした。

「僕は魔法使いに『憲法に意思を持たせる事はできるのか?』って、面白半分て提案してしまった人間さ」

反射的に、手に持っている本を番人はちらりと見る。

この物語に確かに書いてあったと思い起こす。最初に魔法使いへ憲法に魔法をかけてみよう、と提案した人物がいた事を。それが、今この目の前にいる人物。この人物が憲法が存在している事の原点。

「僕は当時、国の歴史的資料や重要文書を管理している施設で働いていたんだ。それでたまたま縁があつてその魔法使いの事を知ってちよつとした出来心で憲法典を持ち出した。……後は、その本に書いた通り、憲法は人の姿を持ち、魔法使いは倒れた」

彼は後悔するように唇を噛みしめ、苦しそうに顔を歪める。

「ここから先が、僕があのお物語に記しておきたかつたけれど、出来なかつた部分だ」

「記しておきたかつたけど、できなかつた?」

頷き、どこか遠くを見つめるように顔を上げた。

「憲法は、元々戦争の為に戦う意思があつたわけじゃない」

「なっ」

「確かにこの国は軍国主義だった。魔法使いを使って戦つたり、魔

法兵器を作っていた。けれど、憲法には『軍事力で他の国を制圧しよう』なんて内容は書かれていない筈だ。憲法内容を反映した意思や思想を持つのなら、憲法個人が強力な力を得ていても、自ら争いを好む理由にはならないはずだ。けれど」

当時の記憶が思い出されたのか、苦々しげに彼は言う。

「あの時の憲法にはね『国王の命令は絶対。王は神』みたいな内容が記されていたんだよ。つまり、憲法は国王の命令に従ったんだ」

「……じゃあ、何であんたはそれを書かなかったんだ」

「国は『憲法』の存在を隠したがっていた。情報の規制も多くて、真実ばかりを書くのは難しかったんだ。それも、国王に触れる事なんて」

善悪の判断もつかない憲法を、戦いに利用している国王。

今この国に国王はいるにはいるが、あくまでもお飾りで国の象徴なんていう扱いだ。情報を規制できるような力、今こそは持ち合わせていないが当時は違ったのかもしれない。

密かに目つきを鋭くした番人には気付かない様子で彼は語り続ける。

彼は、戦争に関わってはいたけれど戦いはしなかった。憲法が生み出された現場にいた者であり、憲法が生まれる発端になった人間として、ある種英雄のような扱いになっていた。素晴らしく強力な兵器を発明した人間、とでもいう扱い。魔法使いも彼と同様にいや、それ以上に称えられた。

「けれど彼はそんな周りの人間に嫌悪していたよ。あの人は……平和が好きで、争いを嫌っていた。ただ、何事もなく暮らしていきただけで、そう言った。そして、憲法を元に戻そうとも考えていたんだ。……無理な話だったけれど」

「何でだ」

「あの魔法使いは……憲法を生み出した事でよほどの力を消費してしまっただのか、魔法が使えなくなっちゃったんだよ」

それでも彼は何かしやうとしていたけれどね。彼は目を伏せる。魔法使いは憲法を戦わせる事に反対した。憲法は兵器ではないと。彼女は道具じゃない、人間だ。感情を持っていなくても、憲法に記された事に反することができなくても、一人の人間だと、そう主張した。魔法使いは特別待遇という名の元豪邸に入れられ、監視された。今更憲法を戦争に使わないなんて選択肢を選ぶことは、国にはできなかった。憲法の力に頼り切っていたから。

何としても国王に異論を唱える機会はないか、ずっとそう考えていた魔法使い。彼は、その魔法使いから相談を持ちかけられていた。

「そして……あの事が起きたんだ」

掠れた声で彼は静かに語り始めた。

+++

「ありがとう！ あなたのお陰で私は外に出る事ができた！」

ボサボサの青い髪にビー玉のような青い瞳を持った青年。その青年が息を切らしながら喜々とした様子で、一人の暗い紫色の髪を持ったもう一人の青年に話しかけていた。

豪邸の裏手にある雑木林の中で二人はしゃがみこみ、青い髪の青年は黒いローブのフードを被って顔を隠す。

「国王に会うなんて、僕は無理だと思う。それに、言ったとしても

無傷で帰してもらえるかどうか……。良くて宮殿で門前払いだ」
「そうかもしれない。けれど私は行きますよ。憲法を戦わせたくな
いから」

意志の強そうな瞳をフードの中から覗かせる青年は、憲法を生み出した一人の魔法使い。憲法について国の説明は、人の姿をしたただの『兵器』なのである。魔法使いはそれが許せなかった。

「私は物にも物なりの意思があるって知っています。人間ほど難解で複雑じゃなくても、少しは願望やちよつとした感情もある。憲法にいたつては人の姿形までしているんです。今は感情がないように見えても、それでも……。私は、普通の一人の人間として扱ってあげたい」

恐怖も微塵もない様子でそう告げると、魔法使いは立ち上がる。紫の髪を持つ彼は、その魔法使いに何かいいたげに口を開こうとしていた。

「じゃあ、色々と迷惑かけてごめんなさい。感謝してるよ」

魔法使いは一度頭を下げると彼に背を向け、一人歩き出した。口ブが風になびきながらだんだんと小さくなっていく背を、紫の髪を持つ彼はしゃがんだまま見つめていた。そして、後姿が消えるあと少しの所で、彼は立ち上がり魔法使いを追いかける。

足音に驚いたように振り返る魔法使いの腕を掴み、彼は言い訳じみた様子で話しかけた。

「どうせここなら乗りかかった船とかいうもの。僕も付き合っつ。それに、僕も一応監視から逃げ出した身だし、見つかるのは嫌だから」

彼の言葉に、魔法使いは微笑を浮かべた。

「じゃあ、お願いします。私も正直一人は心細かったんだ。もう魔法なんて使えなくなっているし」

他に当てもなく、無謀にも程がある魔法使いの行動に呆れかえった表情を彼は浮かべた。魔法使いはローブの中からこそそこそと何かを取り出し、それを目につける。

シンプルなデザインのモノクルだった。

「これつけたら少しは誤魔化せそうな気もするんだけど、いりますか？ もう一つ持っているの」

「僕はいい。あんまりそういうの付けるのは好きじゃないんで」

「ありゃ、そうですか」

街の大通りを極力歩かないようにしつつ、人通りの少ない道を選び、周囲の目に気を配る。どのくらいの人間が自分たちを探しているかは分からないが、魔法使いが国王以外で唯一憲法をどうにかできるかもしれない存在。放っておくことはないだろう。

二人はそう考えていた。しかし、二人の不安に反してすんなりと二人は王宮の近くまで辿りつく事ができた。一人の追手に会う事もなく。

警戒していただけに、拍子抜けした。

「ここからは私一人で生きます」

宮殿より少し離れた路地裏。ここからなら十分もかからないうちに宮殿につくであろう場所で、魔法使いは彼にそう言った。

「こんな所まで付き合ってくれて本当に嬉しいです。ありがとうございます」

ございました」

「……僕は憲法を生み出した君が、憲法に関する事は決めるのがいいんじゃないかって思ったから。だから手伝ったんです」

「そう思ってもらえて嬉しいですよ。……では」

魔法使いは再び頭を下げ、一人で路地裏から出て行った。魔法使いの足音が、雑踏の中に消えていく。しかし彼はその場で腕を組み、ここからどうするべきか迷っていた。

彼の胸中は複雑だった。このまま一人で行かせてもいいのものと、不安めいたものがよぎったのだ。根拠のない直感のようなもの。そのせいでしばらく路地裏から動けない。

宮殿とは反対側へ抜けようとしたり、やっぱり止めたりを繰り返す。

「……やっぱり、行ってみよう」

誰に言うでもなく小さく呟くと、意を決して彼は宮殿へ向かう道走りだした。追手の事など考えていられない。言い知れぬ不安が、悪い予感が、どこかにわだかまる。

走って走って、宮殿前を横切る大きな通りまで辿りつく。大きな門の前に佇む門番二人を、遠巻きに見つめるが、まるで何事もなかったかのように平然としていた。

確かに魔法使いはここに来ていた筈なのに、いつも通り過ぎる気がする。もう魔法使いは退けられてしまったのだろうかと思はれた。考えた。

門番に何かを尋ねるなんて気にもなれず、彼はひとまず宮殿周りを歩いて様子を見てみようと思き出す。慎重に歩みを進め、何か分かる事はないかと感覚を研ぎ澄ませてみたが、結局魔法使いと関連のありそうなものは見つからないまま、再び門の前まで辿りついてしまった。

どうしたものか。困った丁度その時のことだった。

城門が開かれて一人の人間が放り出される。

彼は顔を強張らせた。

そこに放り出されたのはあの魔法使いで。彼はあちこちに傷を負い、足から腕から血を流していた。青い髪にも赤が付着している。腕を震わせなんとか体を起こそうとするが、それは叶わず再び体は地に落ちる。からん、と魔法使いが気休め程度につけていたモノクルが転がった。

そして、魔法使いを放り出した本人もまた、城門の中から現れた。門番二人はそれを見るや否や、驚きと恐怖の表情を顔に浮かべて無様にも後ずさりしていく。片方にいたっては悲鳴をあげて腰を抜かしていた。

ウェーブのかかった水色の髪。纏っている白いワンピースは今はいちこち赤黒いシミで彩られていた。無表情で、何の感慨もなさげに魔法使いを見下すその少女は。

間違いなく、魔法使いが一人の人間として扱おうとしていた、憲法自身だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4346t/>

憲法の番人

2011年12月4日16時02分発行